



次 目

佛教の根本と其の應用(其四).....	本多 日生
開目鈔講話(第二十三講).....	小林 一郎
後諫手引草(上卷).....	本妙院 日珠
宣撫班を語る.....	八木沼 丈夫
法定而國清.....	笹川 日堂
記 事	
○本部團報	
○福島支部報	
○團費誌料寄附金及維持費領收	

號月九年三十四第

13/11-24

財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サマル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人運化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セんと欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ 教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團畧則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

佛教の根本と其の應用

(其四)

本多日生

佛教の根本思想

方便品第二、諸佛世尊は、唯一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふ。舍利弗、云何なるをか、諸佛世尊は唯一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふと名くる。諸佛世尊は、衆生をして佛知見を開かしめ清淨なることを得せしめんと欲するが故に世に出現したまふ、衆生に佛知見を示さんと欲するが故に世に出現したまふ、衆生をして佛知見を悟らしめんと欲するが故に世に出現したまふ、衆生をして佛知見の道に入らしめんと欲するが故に世に出現したまふ、舍利弗これを諸佛は唯一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふと名づく。佛、舍利弗に告げたまはく、諸佛如來は但菩薩を教化したまふ、諸の所作あるは常に一事の爲なり、唯佛の知見を以て衆生に示悟したまはんとなり。舍利弗如來は但一佛乘を以ての故に衆生の爲に法を説きたまふ、餘乘の若くは二、若くは三あることなし。舍利弗、一切十方の諸佛の法も亦是の如し。舍利弗、過去の諸佛も無量無數の方便、種々の因縁、譬諭、言辭を以て、衆生の爲に諸法を演説したまふ、この法も皆一佛

乗の爲の故なり。

前回到佛敎の根本と其の應用と題してお話を始めたのでありますが、今日はその續講としてお話をするのであります。前回到佛敎の見定めをするには四通りほどの方法があるが、その中に於て統一的佛敎觀に依らなければならぬと云ふことを申して、その方針の下に佛敎の根本思想の或る一部のお話を申したのであります。さうして應用の方に就ては、佛敎は最初から應用を尊ぶ宗敎で眞實を明にすることに於ても秀でて居るが、同時に應用に巧妙を極めて居る點にも秀でて居るものであつて、即ち方便と云ふ言葉が盛んに使はれて種々方便と申すほどに自在の應用を試みたる所に佛敎の特色がある。さうして之を時代の推移に依り、又はその地方の事情に鑑みて適當なる應用を試みる事が佛敎を護り、佛敎を盛んにして行く所以であると云ふことを、龍樹、天台等の先輩の思想をも引いて證明をして置いたのである。その應用の内容に入つて、今日の場合に佛敎の應用はどうあるべきかと云ふことはまだお話をしないのでありますが、それは多分又次の回に於て申上げることにならうと思ふのである。今日は佛敎の根本に關して更に補足して申上げやうと考へて居る次第であります。

佛敎は廣い宗敎であります。さうして歴史も長いのであります。色々偉い人が澤山出て意見を發表して居りますから、佛敎の根本と云ふやうな問題はなか／＼面倒な事であります。けれども、併し前回に申したやうに法華經を通してさうして阿含の諸經を活かして、さうして一切經の基準を法華の原則から阿含を利用した眼に於て見て行くならば、それが根本の標準になると云ふことを申したのであります。その思想の下に根本を辿つて行くとき直ぐ分る事があります。それは法華經でどう云ふ所に力を入れて居るか、阿含經でどう云ふ所に力を入れて居るかと云ふことに着想すれば、佛敎の根本思想と云ふものは、直ぐ現はれて來るのであります。枝葉の阿彌陀經ちやとか大日經ちやとか云ふものを辿つてやつて行くと云ふと、どこが佛敎だか分らなくなるのであります。さう云ふ事は唯一人一個に關する因縁話のやうなもので、さう云ふ事柄は數限りなく佛敎の教化手段の中には使用されて居る事であつて、さう云ふものが佛敎の本質では斷じてないのであります。

それで佛敎の根本思想が何處にあるかと云ふことは前にも一言したのであります。更に要點を押へれば、心と云ふことから出發して居るものが佛敎である。大宇宙を説明するにしても、心と云ふものに依つて宇宙を見たのであります。最初はそれが唯識觀、或は唯心觀と云ふ風に心のみのやうな宇宙にのみ徹底をして見定めて、そこで宇宙は唯これ一心、一心法界と云ふくらゐに哲學的に徹底をしてこの宇宙を見定めて居る。併しその心と云ふものの中に物が存在して居るのである、このことは有名な句として『總すれば一念に在り、別すれば色心に分つ』と申して、これが佛敎の哲學であります。いろ／＼枝葉に入れば複雑なものであるけれども、佛敎の哲學觀と云ふものを一言に押へやうと思へば今此處に書くことがさうであります。

この大宇宙を總括して一元として考へたならば宇宙は心であります、その心を總括したものを二つに別ければ色心と申して物と心と斯う別れるのであります。人間と云ふものも矢張りその通りであります、この人間が生きて居ると云ふ以上は大切なものは心であります、併しそれを別ければ心と身と云ふものになるのであつて、一括した時に於て人間とは何ぞやと云ふ時には心が表面になるものである。それが佛教の觀方で、宇宙とは何ぞやと云ふ時には宇宙の大生命、阿頼耶識と云ふものを佛教は哲學的に論證したのである。それは極めて緻密に合理的に説明をせられた、西洋の哲學にも唯心哲學、觀念哲學と云ふものはありますが、なか／＼有力なものであつてさう簡單にこれが壞されるものではないのである。これを佛教では段々進んでこの思想を整頓したる所が實相觀と申すのであつて、たゞ心とのみは申さぬのであります。唯識觀が一轉すれば實相觀となると申す、たゞ心ばかりを取るものではありませぬ、色心不二の一元を心と云ふ字で取るのでありまして、西洋の哲學に行きますれば、これを心的内含一元と申すのであります、心の中に物と心をつめて、さうして心としての一元哲學である。これが全人類の有つて居るところの哲學思想の最高點に達して居る所のものであつて、唯物論であるとか、物心二元論であるとか、ゴタ／＼言ふて居るのは西洋の哲學史の中途である。西洋の哲學史と云ふもの

を規則立つて研究せられたならば、この宇宙の本源を物的内含一元に取るか、心的内含一元に取るかと云ふ風の議論が残つて居るのであつて、これを物的内含として、たゞ物を表に擧げるのみで、その中には心を持つて居る、人間を考へたら直ぐ分るが、この人間と云ふものは物ぢやと云ふても中には心があつて生きて居る。物的内含一元として見る方はこれを全部たゞ物ぢやと云ふが、さう云ふことを強ひて言ふのみであつて、左様な精神作用のあるものを物と見るならば議論はないことで、心も身も同じ物ぢや、たゞ機械の運行ぢやと云ふやうなことを言ふのは、それは意味を成さぬ事であるので、さう云ふ風に心の働さまでも物の機械の運行だと云うて済むならばその研究は要らない事であつて、物と云ふ心と云ふやうなことの研究はお互ひが自分を内省して見たときに、この外の物質のやうに目的もなく、唯唯其處に置かれたらそのまゝヂツとして居るものでなくして、心の中にさまざまの動きをなして、悲しいとか嬉しいとか、大きな目的を以て進むやうに自主的目的觀を以て活躍する所のもの、これを心と名づけて居るのである。だからしてさう云ふことを細かく云へば哲學論になつて數回もお話をしなければならぬのであるが、今日は既に決まつて居ることで今頃急に唯物觀だの、人類の文化は唯物史的に進んだのと云ふことを言ふて居るのは、たゞ一部の學問を本當にしないで或る運動を目的にして其處へ人を引張つて行かうとする爲めにする議論であつて、冷静に學問として研究せられて居るものは、全世界を通じて唯物だのさう云ふやうなことを言つて居る思想は、今や存在しないものであります。

所が佛教は最初からして釋迦如來はこゝに眼を着けられた、だからして悟りと云ふことは心の眼を開いたのも悟り、宇宙を見定めたのも悟りて、同じものになつて居る。佛教の悟りてはそれ故に華嚴經あたりで説かれる所の「心佛及衆生、是三無差別」と申して、一人の心も佛様も、又大勢の全宇宙に擴がつて居る所のものも、人身觀、佛陀觀、宇宙觀と云ふ三つがその結論に於て一致して、本當に見定めれば何處から見ても一つになつて違ひがないと云ふのが佛教の哲學思想であります。宇宙を見定めたのも、佛を見定めたのも、人間を見定めたのも、その思想が完成に達すれば同一點に歸着するものである。さう云ふ偉大なる哲學思想を持つて居りますが、併しこれを素人分りのするやうに一言にして云へば、佛法と云ふものは心を明かにしたと斯う考へれば間違ないのであります。その點が佛教の根本思想にして且つそれが特色である。今日の文化が頭づいて居る、缺陷があると云ふことも、一言にして掩へば心に對する研究が粗雑である。心を粗末にして居る文明、心に對する知識が不備であり、心を重んずる觀念が不備である文明と云ふことが謂へるのであります。機械的の學問、自然科学が旺盛を極めて、精神の文明が疎んぜられて居る文明、斯う云ふことになつて居ると思ふ、釋迦如來は丁度その現代の缺點を看破して居られる方と申して宜いのである。

心こそ第一の實

そこで宇宙の問題にまで入つて實際根本思想は話すべきではあるけれども佛教に疎き方に、急に宇宙から説明して宇宙に上つて行つても、結局は佛教の宇宙觀と云ふものは生きとし生ける者を見定めて來るので、若しも宇宙に心なく、生きとし生ける者がなければ斯う云ふものはどうあつてもこれは宜いのである。下に迷へる衆生なく、上に覺れる佛なしと云ふ、この心ある者の存在が宇宙の中に無いならば、さう云ふ宇宙はどうあつても差支ないのである。例へば國家と云ふものにしても上に統率まします皇室なく、下にこれを奉體して心を一にして進む國民がないならば、日本に皇室がなく國民なくして山や川や土地だけが残つて居ると云ふのであるならば、これが滅びるも滅びないも、雨が降つて山が崩れやうが、海瀧があつて海の中に沈んでしまはうが、何も泣くことも悲しむこともない。國家の存在と云ふものは皇室と人民であるが如くに、宇宙の存在に意義を持つのは、佛と衆生と云ふものを結び付けるのが宗教である。下手に行くと、佛も衆生もそつち除けにして、たゞ宇宙觀を地水火土の五大かなどと云つて考へて居る者があるけれども、さう云ふことは宗教には用のない事であるのである。それは物質に屬する事柄にして、何等宗教には關係はない。この世の中は物質論の言ふ如くに心と云ふものは無いものであり、心を重んずべき必要がなかつたならば、宗教と云ふものは彼等が考へる通り全く要らないものである。所がさうではなくして、現在の生活には心が本であり永遠の生活は心である、大宇宙に就ても心あるものゝ存在に於て意義を持つと云ふ事になれば、そこに宗教がある、だから宗教は一言にして全宇宙の總事物と、一人の心と比較して心の方が尊いと云ふ論結をしてあるのである。世の

中が丸切り黄金の山でありダイヤモンドの山であつても、人と云ふものが居ないとするならばその黄金も石も同じものである。何もそんなものに尊い値打を認めることは出来ない。橋の下に野垂死にし掛つて居る乞食の婆さんの、その微かに息を吹いて居る一つの魂と、全世界を黄金の山で造られて居るのと執方が尊いかと云ふときに、宗教は橋の下に野垂死する婆さんの息を吹いて居る魂の方に値打があると云ふ所に信仰がある。そこを忘れてしまつては宗教と云ふものゝ根本が分らないことになる。お釋迦様はさう云ふ所を非常に徹底的にお考へになつて居るのであつて、そこで心と云ふことが全宇宙を説く場合にも大切であり、人を考へる場合も、佛を考へる場合も、皆心を問題と考へれば差支ないのである。だから哲學的の言葉は華嚴經に於ては唯心法界、唯心これ全宇宙を包む、斯う云ふ思想を發表し、法華に於ては一念三千を具ふると云ふことになつて居るのである。さう云ふ思想は誰しも知つて居る事でもあるし、今更餘り言ふ必要がないのである、もつと碎けた所に佛敎の根本思想をよく押へて置かなければならぬ事がある。

開目鈔講話

(第二十三講)

小林一郎

この間は地涌の菩薩、即ち上行、無邊行等の菩薩が現はれて來られたといふ一段を讀んで居りました。これに就て彌勒菩薩が皆に代つてその意味をお尋ね申上げ、これに對してお釋迦様が御説明になるといふことから、所謂壽量品に入るのであります。それで法華經全體を見渡しますと、いろ／＼徳の勝れた菩薩が現はれて居りますが、その中に於て殊に目立つて見えるのがこの彌勒菩薩であります。これは法華經の序品から既に現はれて居ります。お釋迦様の御身から光が出て、東の方の世界を照らすといふ不思議な事があつた時に、彌勒菩薩が大勢に代つて、その由來を文殊菩薩に對してお尋ねになつた

ことがある。それは何の爲に尋ねたかといへば、彌勒菩薩は自分の爲ではない、大勢の人間に本當の事を知らせたいと思ふから、大勢に代つて尋ねたといふことになつて居る。それでこの彌勒といふのは所謂慈悲を現はすので、彌勒といふ言葉は、支那の言葉に譯すと「慈」といふ意味であります。彌勒菩薩は衆生を救ふといふことを念として居るから、何時でも一切の人に代つてといふ考を捨てない。ものを尋ねるのでも、自分一人の爲に尋ねるのではない。皆の爲に尋ねるのだといふことであつて、所謂慈悲の念といふものが、彌勒菩薩の一生を貫いて居る譯であります。それから文殊菩薩の方は智慧第一と言

はれて居る。だから法華經の序品を讀んで見ると、彌勒が問うて文殊が答へるといふことになつて居る。彌勒は皆に代つて、一體お釋迦様はこれからどういふ教をお説きになるのかといふことを尋ねる。文殊菩薩は非常に智慧の勝れた方であるから、これからは今までの方便の教と違つて、眞實の事をお説きになるに違ひないといふことを答へて居ります。それで支那の天台大師はこの事を解釋して、彌勒菩薩は問ひ、文殊菩薩は答へたのであるが、その功德は同じだといふことを言つて居る。表面から見ると、訊いた人と答へた人では、答へた人の方が偉さうに見えるけれども、決してさういふことではなない。何故なら彌勒は皆に代つて尋ねたのであるから、慈悲の心持といふものが非常に深い。又文殊は皆の疑を決する爲に答へたのだから、その答へたことも實に尊い事であつて、尋ねた人も實に有難いが答へた人も有難い、この彌勒と文殊の功德には優劣

はないと言つて居るのであります。この事は單り佛教ばかりでなく、世の中の事に就ても、吾々はやはりさういふ風に考へなければならぬので、表面に現はれた大きな働をする人ばかりが偉いのではない、その大きな働をするやうに準備をし、その土臺を作つた人の力といふものは、表面に現はれた働とその價値に於て少しも違ひない。だから説く人が偉いなら、説くやうに仕向けた人も偉いのであつて、働く人が尊いなら、働くやうな機運を作つた人も尊いので、その間に優劣はない譯である。これは佛教の信仰としては最も大事な點だと思はれます。そこがシツカリ解つて居ないと、たゞ何でも表面に現はれて人に目立つ事ばかりやりたい、茲に隠れた骨折などは馬鹿々々しいといふことになつてしまつて、健全な世の中の發達といふものは出来ない譯であります。ですから彌勒も尊いが文殊も尊いといふことは、本當によく考へなければならぬことでもあります。

ところが法華經全體を讀んで、一番終りまで行くと、今度は普賢菩薩といふものが現はれて來る。この普賢は『理』を現はす、本當の道理を示すものだといふことになつて居る。それで普賢と文殊といふことになると、理と智を代表するといはれて居ります。その理といふのは本當の事です、智といふのはその本當の事を世の中に説き弘める働きです。これは又智慧といつてもいい。どうしてその智慧の働が出来上がるかといへば、千萬年に亘つて少しも變化しないところの本當の道、本當の道理といふものが解つて、そこではじめて智慧といふものが明かになるのですから、それで普賢と文殊といふ時には、文殊の方は世の中を救ふ智慧を現はし、普賢の方はその根本の千萬年を通じて易らない道理を、自分が覺つたといふことを現はすことになつて居ります。

人を救ふといふ慈悲の心持、その人を救ふ爲には智慧がなければ救へない。自分が馬鹿で何も解らないで人を救はうと思つても救へるものではない。自分の身に力がなければ、人を背負つて助ける譯に行かないと同じやうに、自分が迷つて居つて、人を導いたり救つたりすることが出来るものではありませんから、慈悲を果さうとすれば自分の智慧が進まなければならぬ。その智慧はどうして出来るかといへば本當の道理が解れば智慧が出来る、人間の本當の性質が解らないで、世の中の本當の意味が解らないでは、智慧の働さも慈悲の働さも出来ない譯です。でありますからこの三つは同じものです。慈悲といふことと、智慧といふことと、道理といふことは同じことです、人を救はうとすれば智慧がなければならず、智慧を磨かうとすれば本當の道理を辨へられれば、これを人に説き示すといふ智慧は出来る譯である、その智慧が出来れば人を救ふことが出来るので

『慈』と『智』と『理』と、この三つより外ないのです。

それで吾々の信心といふものは、要するにこの

あるから、慈悲といふものが生ずるのであつて、この三つは少しも離れるものではない。要するに私共が十分な働きが出来ないといふのは、本當の人間の道が解つて居ないからです。解つたやうな気がするけれども本當に解つて居ない。表面だけ解つて居るのであつて、本當に人間とはどういふものか、人生とはどんな意味のものかといふ、所謂理が解つて居れば、それが一切を救ふ智慧となつて現はれる、その智慧があれば、一切の人を救ふといふ慈悲の行ひがそこに現はれて来る譯であつて、この三つのものは決して離れることは出来ない。ですから互が斯うして集つていろ／＼研究をするのは、所謂理を明かにする爲である。たゞ有難いといふ心持だけでよければ、何も忙しいのにこんな處に集つて理窟を言合ふには及ばないけれども、理を明かにしなければならぬ。一體人間はどういふものであるか、佛様はどういふものであるかといふことを明かにして來

ると、どうも佛の教を學びながら、自分一人の我儘な事をして居つては濟まないといふことが本當に判りますから、そこで一切の人を救ひたいといふ心持が自然に起つて来る譯です。さういふ風に理と智と慈悲といふ三つのものは、決して離れることの出来ないものであります。ですから若し自分が信心を怠つて、研究を怠つて、何も解らずに居つて世の中を救はうと言つても、本當に救ふことは出来ない譯です。どうして人を救つたらいか、どうして世の中を導いたらいか、その見當がつかないで、たゞ世の爲め、人の爲め、國の爲めと言つたところが、それはまるで夢を見て居るやうな話になる。ですから一面に於て、私共は自分を修養して、自分を完全にするといふことを忘れてはならない譯です。又自分を善くすれば必ず人の爲になるに相違ない。若し自分が覺つて、「他の者は馬鹿だ、他の者は自分と段が違ふ」といつて、一人で濟まして居る人があれ

ば、それは本當に覺つた人ではない、本當に覺つたならばそんな心持になる譯がない。何の爲に自分が覺るのであるか、何の爲に信心をするのであるかといへば、一切の人間を救ふやうになつてこそ、はじめて覺つた甲斐があるのでありますから、この慈悲といふことと、智慧といふことと、本當の道理を辨へるといふ三つの事は、少しも離れたものではないのであります。

この事はよほどシツカリ考へて置かないと、兎角世の爲め人の爲めと言ひながら、少しも役に立たないで一生涯夢のやうに終る人もある。しかし又世の中の事を考へないで、自分一人の覺りばかり考へると、少し覺つて來ると世の中の間が馬鹿に見えて世間を離れたいと思ふやうになる。それはいけないのです。この慈悲の働きの智慧の働きの、絶対の道理を知るといふことは、決して離れることは出来ない。何時でも通じて一つの大きな力になるのだとい

ふことをよく考へなければならぬのであります。お互が斯ういふ處に集まるのは、要するに理を明かにする方でありますが、その理を明かにしたならば、それが智慧となつて現はれ、それが慈悲の行ひとなつて現はれるといふことを離れないやうに、そこまで力が伸びて行かないと、折角研究しても何にもならぬことになりまます。この事は法華經を讀んで見ると實によく明かになつて居りまして、初めに序品に於て彌勒菩薩が出て來て、それから一番終りの勸發品に普賢菩薩が出て來る。即ち慈悲の働きの、智慧の働きの、絶対の理を覺るといふことは少しも離れない、終始一貫してこれがよく現はれて居ることは、大變に尊い事と思ふのであります。さういふことを考へて私共は自分の信仰を勵んで參りたいと思ひます。

その彌勒菩薩が、今此處に上行、無邊行等の菩薩が現はれたに就て、自分の疑だけではない、他の

者の疑を決する爲にお尋ねを申上げるのでありませす。

彌勒菩薩心に念言すらく、我は佛の太子の御時より、三十成道今の靈山まで四十二年の間、此界の菩薩、十方世界より來集せし諸大菩薩皆しりたり。又十方の淨穢土に或は御使、或は我と遊化して其國國に大菩薩を見聞せり。此大菩薩の御師なんどは、いかなる佛にてやあるらん。よも此釋迦、多寶、十方の分身の佛陀には、にるべくもなき佛にてこそおはすらめ。雨の猛を見て龍の大なる事をしり、華の大なるを見て池のふかき事はしんぬべし。此等の大菩薩の來る國、又誰と申す佛にあひたてまつり、いかなる大法を

ももつと勝れた佛様であらう。龍が雨を降らすのだから、雨が澤山降れば龍が大きいといふことが判る。蓮の華が大きく咲くの中には、根が深くなければならぬのだから、蓮の華の美しいのを見ればその根が深い、根が深いといふのは池が深いといふことが判る。そのやうに今この大勢の菩薩が、こんな勝れた菩薩であるといふことが判つた以上は、この菩薩を誰が教へたのだらう、どうかその佛のことを知りたい。又どんな佛に就いて、どんな教を研究して斯ういふ偉い菩薩になつたのであらうか、斯ういふ疑を懐いた。さうしてこれは自分一人の疑ではなから、大勢の代りにこの疑をお尋ね申したのでありませす。

あまりの不審さに音をもいだしすべくもなけれど、佛力にやありけん、彌勒菩薩疑ふて云く、無量千萬億の大衆の諸の菩

か習修し給らんと疑し。

彌勒菩薩が心に念ふには、自分はお釋迦様が太子であつた時から、三十歳で覺を開かれて四十年の間教をお説きになつて、今靈鷲山に於て法華經をお説きになる、この間のことを皆知つて居る。その間に十方の世界から大勢の菩薩がも集りになつたといふこともあるし、又自分がこの世界ばかりでなく、他の淨土や穢土に佛の使となつたり、或は又自分が他の世界を知りたいといふ心持が起つて行つたこともあつて、この世界のこと、十方の世界のことも皆知つて居る。しかし今此處に現はれた地涌の菩薩といふやうな、こんな偉い菩薩を今まで見たことはない。これはどういふ人が師匠となつてこんな菩薩を教へたのか、實に不思議である。若し斯ういふやうな大勢の菩薩を教へるだけの佛様であるならば、お釋迦様とか、多寶如來とか、十方の世界の佛様より

薩は、昔より未だ曾て見ざる所なり。是諸の大威徳の精進の菩薩衆は、誰か其の爲に法を説いて教化し成就せる。誰に従ふてか初めて發心し、何れの佛法をか稱揚せる。世尊、我昔より來、未だ曾て此事を見ず。願はくは其所從の國土の名號を説きたまへ。我常に諸國に遊べども未だ曾て是事を見ず。我此衆の中に於て乃し一人をも識らず。忽然に地より出でたり。願はくは其因縁を説きたまへ等云云。

この疑はあまり大きな疑であるから、なか／＼口では言へない位だけれども、しかしそこは佛様のお力が彌勒菩薩の心に通つたと見えて、彌勒菩薩は自分の心に懐いて居る疑を言ひ現はして、この問題の

解決をお願ひ申した。これは彌勒菩薩が自分一人の疑ではない。前に申したやうに、大勢の人間が皆疑つて居ることを、彌勒菩薩が代表してお釋迦様に申上げるのです。其處に集つて居る無量千萬億といふやうな大勢の者が、この菩薩達は昔から未だ見たこともないやうな、人数も多いし、又その容姿を見ても實に勝れた菩薩と思はれる。こんな徳もあれば又修行もこれから續けて行かれるやうな菩薩達を誰が教へたのであらうか。この事を知りたいといふのです。

此處に『大威徳精進の菩薩衆』とあります。これは短い言葉であります。吾々大乘の佛教の修行をする上に於ては大變有難い言葉であります。大威徳といふのは自分が現在非常に徳が勝れて居る。『威』といふのは周囲の人を威化することを言ひます。この威の字は今では何か『おどす』といふやうな意味に讀むものですから、初めの意味と違つて來て居り

ますが、本來は人を威化する力のあるのを威といふので、たゞ威張ることではない。だから威徳といふのは人を動かすほどの大きな徳を具へて居るといふことです。これは誰でもさうでありませう、本當に自分が偉くなつて來れば、自然に周囲の人を威化して、善い方に導くだけの働きが出来るのでありますから、これを威徳といふ。大威徳といへば非常に自分が偉くて周囲を皆威化して、皆を善くするといふだけの力を具へた人であります。ところがそれだけで満足しないで精進するといふ、もつと偉くなりた

いといふ心持を有つて居る。『精進』といふのは傍目もふらずに、自分が佛の境界に到達するまでは飽くまで信仰を勵まう、飽くまで修養を積まなければならぬといふことです。だから大威徳精進といふのは非常に有難いことで、現在皆を威化するだけの力があるけれども、それで満足しないで、モット善く

いふのです、吾々もどうかさうなりたいたいものであります。今の私共はつまらない者で何も力はありませぬが、どうか周囲の人を威化するだけの力を具へたい、それだけで満足しないでモット善くなりたいたい、自分が佛の境界に到達するまでは決してこの努力を止めまいといふ心持を有つて行くことが、威徳と精進といふことで、これが兩方具つて、はじめて本當の大乗の修行をする者といふことが言へる譯であります。ですからこの上行、無邊行等の菩薩に對して、大威徳精進の菩薩と言つたのは、短い言葉であります。その大威徳精進の菩薩、大變勝れた菩薩だと思ふ

が、誰がこの人の爲に法を説いて、教化して斯ういふ立派な菩薩にしたのであるか、一體誰に従つて初め發心して、佛道の修行をしたいといふ心持を起したのか、又どんな佛の教を稱揚したのか。稱揚する

といふのは口で讀めるだけではない、有難いと思

ふ。有難いと思はなければその修行をする氣になりません。どういふ佛の教を有難いと思つてその修行をして、これ程の偉い者になつたのであるか。世尊よ、自分は昔から未だ曾て斯ういふ勝れた菩薩にお目にかゝつたことはない、願くはこの菩薩が何處から來たのか、その來た處を教へて戴きたい。自分はこの娑婆世界ばかりではない、常に方々の國々に行つて居るけれども、まだこの菩薩のやうな勝れた人に會つたことはない。而もこの大勢の人を見たところが、一人も自分は前から識つて居る者はない。全く自分達と今まで縁の無いやうな人が、忽然として俄に地の底から出て來たのであるから、實に不思議に思ふ、願くはその因縁を聞かして戴きたい。斯ういふことをお願ひしたのであります。

天台云く、寂場より已降、今座已往、十方の大士來會絶えず。限るべからずと雖

も我補處の智力を以て悉く見、悉く知る、
 而ども此衆に於て一人をも諷らず。然る
 に我十方に遊化して諸佛に觀奉し、大衆
 に快く識知せらる等云云。妙樂云、智人
 は起を知り、蛇は自ら蛇を識る等云云。
 經釋の心分明なり。詮する處は、初成道
 よりこのかた、此土、十方にて此等の菩
 薩を見たてまつらず、聞かずと申なり。

そこでこの言葉を天台大師が「法華文句」といふ
 書物の中に説明をして言ふのに、「寂場より已降」
 寂場といふのは華嚴經を説かれた處を謂ひます。
 『寂』とは一切の迷を除くといふ意味で、お釋迦様が
 佛陀伽耶といふ處で六年の間難行苦行を積まれて、
 スツカリ自分の心の迷を取除いて、一番先にお説き
 になつたものが華嚴經であります。ですから寂場と

らつしやる間は、お釋迦様が教をお説きになるが、
 そのお釋迦様が入滅になつた後には、お釋迦様の地
 位を補つて、その代りに一切の人を救ふやうな人、
 これを補處といふのです。つまり佛の後繼になるく
 らるな勝れた菩薩を補處の菩薩といふのでありま
 す。それは前に申したやうに、慈悲の心持が一番大
 きくあるから、末の世になつて一切の人を救ふとい
 ふのには、何といつても慈悲の心持より根本になる
 ものはない。ですから慈悲の心持の最も厚い人が補
 處の菩薩である。即ち佛の地位を補つて、佛の代り
 になるべき人だと考へられる。そこで彌勒菩薩は即
 ち補處の菩薩である。さういふ慈悲心がある、又智
 慧が具つて居る。前にあつたやうに慈悲と智慧とい
 ふものは續いたものでありますから、そこで彌勒の
 補處の智慧の力を以てもといふのであります。人間
 が「人はどうでも自分さへ宜ければいい」といふや
 うな心持を以て、己れに執はれて居ると、智慧が薄

いふのはお釋迦様の一番初めの説法、即ち華嚴經の
 説法といふ意味であります。それから「今座」とい
 ふのは、今靈鷲山に於て法華經を説いて居らつしや
 る、その法華經を説かれる處を今の座といふ、です
 から華嚴を説かれてから、今法華經を説かれる迄の
 間、即ち四十年の間に「十方の居士來會絶えず」こ
 の世界に他の世界から菩薩が來てお釋迦様の教を伺
 つたり、又不思議な働きを現はしたといふことは以
 前から幾度もあつた。「限るべからず」自分達が知
 つて居るだけでもさういふことは度度あるのだが、
 自分達の知らない場合にも、他の世界から菩薩がこ
 の世の中に現はれたといふことはあるだらうから、
 これは到底數へ盡せない程あるだらう。それを自分
 (彌勒菩薩)は一通り心得て居る。それは何故かと
 いふと、彌勒菩薩は補處の菩薩と謂はれて居る。
 『補處』とは佛の處を補ふといふ意味で、佛様の代
 りになる人といふ意味です。お釋迦様が世の中に居

むものです。自分の都合ばかり考へて居れば本當の
 智慧は無くなつてしまふ。物を見ても本當に見えな
 い、物を聞いても本當に聞えない、自分の都合の好
 いやうにばかり見え、聞える。自分の事を捨て、見
 ると本當の事が解る。だから慈悲の心持の無い者
 が、大きな智慧を具へることは決して出来ない。で
 ありますから彌勒菩薩は非常に慈悲の深い方で、佛
 に代るやうな方であるから、智慧も非常に勝れて居
 る。その補處の智力を以て、彌勒は十方の世界から
 集つた菩薩の事を皆知つて居るといふのです。

ところが今此處に現はれた上行、無邊行といふ
 やうな菩薩達は、一人も自分が見て居らない。然る
 に自分は十方の世界を方々歩いたこともある。又お
 釋迦様ばかりではない、他の世界へ行つて他のいろ
 いろな佛様にお仕へ申して、その教を伺つたことも
 あるのだが、自分はこの娑婆世界ばかりではない、
 他の世界でも相當に知られて居る者である。その自

分が知らないやうな、見たこともないやうな菩薩が此處に現はれて来たといふことは、實に不思議な事である。これは一體どういふ譯であらうか。お釋迦様は僅か四十年しかこの世で教を説いて居らつしやらないのに、自分達が思ひがけないやうなこんな大勢の、而も徳の勝れた人を今までにお教へになつたといふことはどうもわからない、その理由を承りたい、斯ういふ意味で彌勒菩薩の質問があつたのだといふことを、天台大師は説明をして居るのであります。

又天台の後に出了た妙樂大師といふ人が『法華文句記』といふ書物の中に、今のことを説明して云ふのに、智慧のある人は物が起つて來ると、それがどうして起つたのか、これから先どうなるかといふ、物の移つて行く道筋がよく判るものである。蛇といふものは他の蛇の歩いて行く道をよく諳つて居る。それと同じやうに、自分の智慧が勝れて居れば他の人

のやることも大體判る。それだから本當に自分の智慧が勝れて居ない以上は、佛の御働きがどんなものかといふことは判る筈がない。それ故に彌勒がお釋迦様に向つて、佛様の本當のお心持のある所を伺つて、自分達のこれから進んで行く道を定めたいといふ考であるだらう。斯ういふことを妙樂大師も説明をして居る。

この經を解釋する言葉は明かであるから、これ以上の説明をする必要はない、「詮ずる處は」要するに初成道よりこの方、即ちお釋迦様が覺をお開きになつてからこのかた、その娑婆世界及び十方の世界に於て、上行、無邊行といふやうな今まで見たこともない、又今まで斯ういふ菩薩のことは何も聞いたことがない。斯ういふ意味で彌勒が質問をしたのである。

佛此の疑を答へて云く、阿逸多、汝等昔よ

り未だ見ざる所の者は、我是の娑婆世界に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得終りて、是諸の菩薩を教化し示導して、其心を調伏して道の意を發さしめたり等。又云く、我伽耶城、菩提樹下に於て坐して最正覺を成ずることを得て、無上の法輪を轉じ、爾して乃ち之を教化して初めて道心を發さしむ。今皆不退に住せり。乃至、我久遠より來、是等の衆を教化せり等云云。

そこでお釋迦様がこの疑に答へて仰しやるには、阿逸多よ、——阿逸多といふのは彌勒の名前であります。お前は昔から斯ういふ菩薩を見ないといふけれども、自分はこの頃になつてこの娑婆世界に現はれたのではないのだ、印度の國王の子として世の中に出てからは僅か百年足らずだけれども、自分は昔

から幾度となくこの娑婆世界に出て幾度も教を説いて居るのだ。一體遠い昔から、千年も萬年も數限りない昔から自分は佛であつて、さうしてこの娑婆世界に縁があるから、昔から繰返しこの世の中に出て教を説いて來たのだ。お前達の眼には僅か四十年、五十年の佛に見えるかも知らんけれども、自分はモウ遠い昔からの佛である。而も自分はこの娑婆世界に深い縁の有る佛である。この娑婆世界に於て阿耨多羅三藐三菩提、即ち佛の智慧を具へ、佛の覺りを得て、それからこの大勢の菩薩を「教化し示導して」善い行ひをするにはどういふ風にしたらい、かといふことをよく示し、これ等を導いて、さうして「其の心を調伏して」——心の迷を除かして、「道の意を發さしめた」のである。道の意といふのは、一切衆生を教へ導かうといふ大慈悲の心持を起されたのである。だからこの頃の弟子ではない、遠い昔からこの娑婆世界に住して居つて、大勢の人間

を教へてやつたのだ。斯ういふことを仰しやる。これは前の彌勒菩薩の間に對して答へられた涌出品のお言葉であります。

又仰しやるには、自分は伽耶城といふ所の菩提樹の下で最正覺、即ち佛の覺りを成就することが出来た。それから以後に無上の法輪を轉じた。「無上の法輪」といふのは最も勝れた教である。それを世の中に説いて、世の中の人を教化して道心を發さしめた。その時に教へた者が、皆「不退に住す」といつて、信仰が少しも變らないやうになつて居るのだ。斯う言はれて、それから暫らく間を置いて、自分は遠い昔からこれらの者を教化したのだ。斯ういふことをお釋迦様が言はれたのであります。

これはこの文章だけでいへば明かに矛盾であります。自分が伽耶城の菩提樹の下で覺つてから、これ等を教へたといふのであるから、さうして見るとまだ七、八十年にしかならない。さう言つて置いて直

つて、教をお説きになる。斯ういふ事は遠い昔から何遍繰返されたか判らない。それで法華經の中にもその事を始終言つてあります。何時の場合でも、佛がイキナリ出て教を説くといふことはしない、皆と同じ世界に生れて、皆と同じやうに育つて、人生の事に就て煩悶を起して、それから出家して、修行して、覺つて、さうして教を説くのだ。それでお前達も自分のやうに眞面目に考へて、眞面目に修行すれば、自分の通りに覺れるぞといふ、活きた手本をお示しになつて、それから教をお説きになる。それだから教といふものが價値を有つて居るのである。ただ理窟を説くのではない、斯ういふことです。ですから釋迦様の御一代を「八相」と申しまして、八つの時機に分けるのでありますが、その八相といふのは、どんな佛も皆八相を執られるのであります。決して佛様は世の中に出てイキナリ教を説くのではない。どの佛様でも先づ修行して、それから覺

ぐ、久遠の遠い昔からこれらを教へたといふのですから、まるで前後矛盾したことを言つて居らつしやるとしか思へない。これを不思議と思はなければ、思はない方がよほど不思議な譯です。ですからこの菩提樹の下で覺つたといふことも、佛様は今まで幾度も繰返されたのだと解釋しなければならぬ。お前達の知つて居るところでは、七、八十年前に修行して覺つたと思ふかも知らんけれども、修行して覺るといふことを、自分は遠い昔から何遍も繰返して居る。斯ういふ風に解釋しなければならぬ。その佛様が即ち壽量品にある「本佛」といふ、唯一の佛様であります。その佛様が吾々を憐んで吾々をお教へ下さる時に、イキナリ教を説かれるといふことは決してなさらない。先づ教を説く前に、その實行の手本をお示しになつて、それから教をお説きになる。だからお釋迦様が世の中の問題に對して煩悶苦悶して、それから出家して、修行して、覺

つてさうして、教を説かれる。これは身を以て手本をお示しになるので、そこが佛教の非常に有難い所であります。

この事は、他の教に於てはさういふことではないので、例へば耶蘇教のバイブルでも何でも、讀んで御覽になれば判りますが、他の豫言者とか、聖人とか賢人といふものは、イキナリ教を説いて居る。お釋迦様はさうではない、先づ手本をお示しになつて修行して見せて、これも吾々に對する身を以ての教であります。この通り修行して、この通り難行苦行を積んで、この通り考へる、さうすればこの通り覺ることが出来るといふことを、事實を以てお示しになつて、それから口で教をお説きになるのであります。ですから吾々が佛教を學んで行くと、自分達の向いて行く道がよく判ります。イキナリ佛様になるのではない、佛様になる迄の道筋がスツカリ示されて居るから、吾々はそのお釋迦様が身を以てお示し

下さつた道筋を後から随いて行けば、今は凡夫だけれども、だん／＼覺れるナといふことが判つて來るのであります。そこで佛は何時でもさうだといふのです。何時の場合でも佛は世の中に出て教を説く時には、イキナリ説きはしないぞ、斯ういふことを言つて居られる。ですから佛陀伽耶の菩提樹の下で覺を聞いたといふのは、お前達の見るのはたゞ一度しか見えないけれども、昔から自分は繰返し／＼それをやつて居るのだ。何時でも世の中に出て出家して修行して、覺つて、それから教を説いたのだ。今度時機が來れば又世の中に出て、修行して、覺つて、教を説く、斯ういふ事を繰返し／＼やつて居るのだといふことを打明けられたのであります。でありますから今末法の世に生れた吾々も、やはりその道を歩いて行くより仕方がないのです。人生に對して煩悶を起したら、これを解決する爲に修行して、苦心して、骨折らなければなか／＼覺れるものではあり

まかんから、だん／＼難行苦行を積んで、さうして覺つて、その覺つた所を世の中に弘めよう、斯ういふ佛様のお通りになつた道を、自分達のこれから正しく履んで行くべき道として、これを通つて行かう、斯ういふより外ない譯であります。それが非常に尊い事です。初めから覺れるものではありませんから、やはりお釋迦様のお通りになつたやうな道を通つて、そこで初めて覺れる譯であります。

しかしさういふ深い意味が、初めから説き現はされるものではありませんから、今此の所だけで見るとをかしい。この佛陀伽耶で覺つてから弟子を教へたと言はされかと思ふと、久遠の遠い昔からの弟子だと言はれるのですから、今私が説明したやうな事が判れば不思議はないけれども、そこまで判らないうで、たゞこの言葉だけを讀むと、まるで矛盾したやうに思はれる。そこでこの問題を解決する爲に、彌勒菩薩が更に質問をするのであります。

此に彌勒等の大菩薩大に疑おもふ、華嚴經の時法慧等の無量の菩薩あつまる。

いかなる人人なるらんとおもへば、我善知識なりとおほせられしかば、さもやとうちおもひき。其後の大寶坊、白鷺池等の來會の大菩薩も、しかのごとし。此大菩薩は彼等にはにるべくもなき、ふりたりげにまします。定て釋尊の御師匠かなんとおほしきを、令初發道心とて、幼稚のものどもなりしを教化して弟子となせりなどおほせあれば、大なる疑なるべし。日本の聖德太子は人王第三十二代用明天皇の御子なり。御年六歳の時、百濟、高麗、唐土より老人どものわたりたりしを、六歳の太子我弟子なりとおほせ

ありしかば、彼老人ども又合掌して我師なり等云云。不思議なりし事なり。外典に申す、或者道を行けば、路のほとりに年三十計なるわかものが、八十計なる老人をとらへて打けり。いかなる事ぞとへば、此老翁は我子なりなど申すとかたるにもにたり。

彌勒菩薩が更に大きな疑を起した。何故かといふと、華嚴經をお説きになつた時に、法慧菩薩といふやうな澤山の菩薩が其處に集つて來た。さうするとお釋迦様はこの菩薩達に對して、これは我が善知識なりと仰しやつた。これは自分より先に覺つて居る菩薩だ、自分の先輩だ、斯う言つて居らつしやる。さうかと思つて居つたところが、その後大寶坊といふ處で、これは大集經といふお經をお説きになつ

た。又白鷺池といふ處で般若經といふお經をお説きになつた、その時も大勢の菩薩が集つて来た。その菩薩に對してやはり前のやうに、これは自分より先輩だ、自分は今初めて教を説くのだが、これ等の菩薩は自分が教を説く前から覺つて居るのだ、斯う言はれて居る。それを以て見ると、お釋迦様より前に覺つた人があつたらしい。然るに今大地から現はれて来た上行、無邊行といふやうな菩薩は、その大集經や般若經を説かれた時に出た菩薩よりも、モット前から覺つた人のやうに見える。だからこれはキツトお釋迦様のお師匠様か何かだらうと思つて居つた。ところがそれに對して、『イヤこれは自分が教へてこの頃覺らせた者だ』と仰しやるのだから、どうも何だか判らなくなつて来た。さうして見るとお釋迦様はどうしてもこの頃の佛ではない、遠い昔から佛様であつたといふことがハッキリ言はれなければ、この疑問は解けない譯である。斯ういふ事がこ

こに問題として出て来る譯であります。これは人間の生命といふものが、たゞ此の世だけではない。佛様でもイキナリ印度に飛び出して來られたのではなくして、前の世からモウ佛としていろいゝ世の中を教へ、人を導く爲に力を盡された、その結果又印度の淨飯王の子として現はれて來られたのだといふ風に考へなければならぬ。この事はお釋迦様ばかりではなく、例へば日本には聖德太子といふ方があつて、聖德太子は人王第三十二代の用明天皇のお子様である。ところがこの聖德太子が御年六歳の頃に、百濟、高麗、唐土等から老人が渡つて來た時に、その六歳になる聖德太子がその年寄りを促まへて、『これは自分の弟子だ』と仰しやつた。老人達も合掌して、『あゝ、この太子は自分の先生の生命といふものは、前の世の生命の續きであるといふ思想を、この話が現はして居る。眼の前に現は

れたところでは聖德太子は六歳である。朝鮮、支那から來た者は老人である。しかし智慧に於て聖德太子の方が老人より上であれば、この老人は子供の弟子だといふことが言へる。どうして聖德太子が子供であつてそんな智慧を具へて居らつしやるか。それはこの世だけではない、前の世から信心をして前の世に於て、どんな老人をも教へ導くだけの智慧を具へて居らつしやつた。その方が聖德太子となつて現はれになつたから、子供であつても老人の先生であると言はれ、老人も掌を合せて拜んだといふのである。

この思想は總てに亘つて考へられるのでありまして、佛教に於ては宿縁といふことを始終言つて居ります。前の世から續いた縁だといふことです。今私共は洵につまらん者ですけれども、此處で法華經を讀んだり、日蓮聖人の御遺文を讀んだりして御一緒に研究をして居る、これ亦宿縁です。この世だけで

こんな縁が結ばれたのではない、自分達はつまらん者だけれども、前から佛の教を學んで居つた、その縁がこの世に來て又熟したればこそ、お互が斯ういふ處に集つて、同じやうに佛の教を學び、同じやうに信仰を語り合ふものだ、斯う考へなければならぬ。こんなことは、今日の科學的思想からいへば、馬鹿々々しいことだと思ふ人もあるでありませうけれども、私はこの頃になつてさういふ事を本當にしみ考へるのです、試みに考へて見ませう、今全世界の人間の數が十六、七億に達して居る。その澤山の人間の中に、正しい人も、眞面目な人も、勝れた人も随分多いでせうけれども、その正しい勝れた人が、佛様を知つて居るといふ人は極めて少ない。人間としては實に立派な人でありませうが、大多數の人は佛様の名も知らない、佛の存在も知らないで死んで行つてしまふのです。吾々は洵に凡夫であつて、罪を犯し、過ちを重ねて居るのだけれども、何の

幸があつてか佛の教を學んで、又佛の魂を打込
んで説かれた法華經の一端を學ぶことが出来るとい
ふことは、實にこの世だけの縁とは思へない。やは
り前からさういふ縁があつたのだらう、その前の縁
が又こゝに於て熟して、こんな有難い事に出會つた
のではないかといふことが、しみん／＼考へられるの
であります。さうして見ると、こんな有難い縁を今
こゝで無駄にして、今こゝで骨折らずに居つたなら
ば、折角の縁が又消えてしまひはしないかと思ふ
と、これは勿體なくて仕様がな、この縁を無駄に
しない爲に一生懸命に力を盡さう、斯うも考へられ
る。これが所謂宿縁といふ思想であります。

斯ういふ事を又人間社會の出來事に移して考へて
見ると、人間の倫理道德といふものの根柢もこゝに
あるのであつて、決して世の中に偶然といふものは
ないので、この世に於て親子となり、この世
に於て夫婦となり、兄弟となるといふことも、決し

ふものがシツカリと落著いて來ると、人生の倫理道
徳といふものがシツカリした根柢を有つ譯でありま
す。この世の親子、兄弟、夫婦がこの世だけでない
といふことが判れば、これを無駄にしては濟まない
譯です。一日同じ家の内に住んだことでも、一日の
縁ではない、前からの縁だと思へば、この縁を無駄
にすることは出来ない筈であります。でありますか
ら徳川時代の漢學者などが言つたやうに、佛敎とい
ふものは世の中の無常を教へるものだから佛敎が盛
んになれば倫理道德は駄目になるといふのは、これ
は淺はかな考へです。佛敎が本當に解つたら、三世
に亘つての因果が本當に解るのでありますから、決
して倫理道德をいゝ加減にすることは出来ない筈で
す。どうしても宿縁といふことを考へると、人間の
情愛、人情といふものが非常に深くなつて來ます。
いゝ加減なものではないから、これを無駄にしては
濟まない、斯うなつて來る。又友達同志でもさうで

てこの世だけでは無い。この世で偶然に出來たので
はない、前の世からのいろ／＼な結び付き、いろ
いろな關係がこゝに現はれて、こゝに熟して親子と
なつたのだ、夫婦となつたのだ、兄弟となつたのだ
といふことを考へて見ると、この世だけの縁をこの
世だけで終らせたくない。前からの縁であるから、
この縁を何とか善くして、後までもこの善い縁を續
けて行きたい、斯ういふ心持が起つて來る筈であり
ます。さういふ事を考へないから、どうも今の世の
中のやうにいゝ加減になつてしまふ。「ナニニ親子
だつて人間が死ねばそれまでだ」、「夫婦だつて兩方
の意見が合はなければ結婚解消だ、ナニニ行く奴は
行つてしまへ……」といふことになるのですが、こ
れは實に淺はかな考へであつて、決してこの世の事は
この世だけで定つたのではない。前からの續きのこ
の縁を無駄にしたのでは濟まないではないかといふ
心持が起る譯であります。ですから佛敎の信仰とい

す、縁あつて同じ佛の教を信ずる、縁あつて同じ法
華經を信ずる、これはこの世だけの縁ではない。斯
う思ふと、何とかして互が力を協せて、この縁を
無駄にしたいものだとといふ心持が起つて來なけ
ればならん筈です。ですから本當に佛敎を學ぶと人
情が篤くなる、眼の前の出來事が眼の前だけと思へ
ないから、非常に深いものに考へられて來る。そこ
を考へないから所謂瞬間主義になつて、「ナニニそ
の時面白ければいゝ、厭になつたら捨てしまへ……
……」といふやうになる。皆がさういふ心持を有つて
居れば、人生といふものは支離滅裂になつてしまふ
譯であります。さういふ譯で、前の世からの縁とい
ふことは、人生をシツカリした根柢の上に置く爲の
大事な思想だといふ風に考へて見ると、これは非常
に尊い事でありませう。

それだから聖徳太子のやうな方は、前の／＼世か
らの御修行の結果であるから、どんな小さいお子さ

んであつても、年寄りを自分の弟子だと仰しやる、又老人も小さい聖徳太子の徳の勝れて居ることを見て合掌して、我が師なりと言つたといふ。これはただ昔の話だと思つてはいかんであつて、さういふ風に解釋すれば非常に尊い事でありませう。

それから外典といふのは支那の書物であります。これは支那の書物に『神仙傳』といふものがあるが、これの中に書いてある話であります。或る人が道を歩いて行つたところが路のほとり、或る人が八十ばかりになる老人を捉へて殿つて居つた。どうも都合ではないか、お前は自分の親のやうな老人を捉まへて打つといふのはどういふ譯であるかと詰つたところが、その若い者が答へて言ふのに、『イヤこれは私の子です、この子が自分の言ふことを聞かないから懲めの爲に打つて居るのです』と言つたといふ話がある。それもやはり人間の命がこの世だけでないといふことを解釋すれば、さういふ不思議な事も一向不思議でなくなるの

でありませう。これと同じことであつて、チヨット眼の前に見たところでは、お釋迦様が印度の國王の子として御出現になつて以來、お覺りになつたのは三十歳の時だと言ひますから、七十過ぎまで僅か四十何年である。その間に於てこの數限り無い大勢の人を教化されたといふことは、實に不思議に思はれる。

されば彌勒菩薩等疑ふて云く、世尊、如来太子たりし時、釋の宮を出て伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまへり。是より已來始めて四十餘年を過ぎたり。世尊、云何ぞ此少時に於て大に佛事を作したまへる等云云。

そこでその事を彌勒菩薩等が申して云ふには、世

尊よ、世尊が太子であつた時に、釋氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して六年の間難行苦行を重ねて、阿耨多羅三藐三菩提、即ち佛の智慧を成就なさつた、それ以來今まで四十餘年餘か經つて居りませぬ。然るにこの四十餘年の間に、どうしてこんなに大勢の人を教へて菩薩にすることが出来たのでありますか。今この大地から涌出た菩薩といふものは數限り無くあるのであるが、こんな澤山のの人に教を與へるといふことをどうしてなさつたのでありますか、斯ういふ疑を提出した譯であります。

こゝに『佛事』といふのは、別の言葉で言へば『救護』でありまして、これ以外に佛事はない。救ふといふのはどういふことかといへば、放つて置けば人間が間違ひをなし、罪を犯す、その間違ひをなさないやうに、罪を犯さないやうに、危いから救ひ上げ

て、世の中の悪人も初めから悪人ではない。何か悪い事をしさうな時に、誰か行つて止めればそれで済むのだが、誰も止める者がないからだん／＼墮ちて行つて悪人になる。それを甚しくならない間に引止めて、悪い方に墮ちないやうにすることを救ふといふので、これが大事であります。それから又一方に於て護るといふのは、善い方へ行きさうな力をかけて、後ろから後を押して、善い方へ／＼と押進める、それを『護』といふ。これも大事です。自分が少しばかり善い事をした時に、人が注意して呉れないと、誰も知らないからといつてツイ怠けてしまふ。それを人が注意して、あゝ善い事だ、モットやれといふ風に勵まして呉れると、初めチヨット小さい善い事をしたのが、だん／＼大きくなつて非常に大きい善い事をするやうになる。その善い事をモット勵ますことを護るといふ。それでどうしても救と護と兩方やらないといけないので、子供を育てるので

もこの兩方が大事であります。悪い事をしたらそれを再びしないやうに救つてやる、善い事をしたらモット善くなるやうに護つてやる。兩方やらないと本當に人間は善くならない。佛様が世の中に出て吾々に教へて説きになるのは、要するに救と護です。吾が凡夫の生活に墮らないやうに救つて下さる。吾が智慧を成就し、慈悲の行ひを盛んにして、佛の境界に到達するやうに護つて下さる。この救と護が具つて即ち人を教へるといふことになるのです。それを佛事と申します。今では何か坊さんと呼んでお経でも読んで貰ふことを佛事と言ひますけれども、本當の佛事といふのは、今申す救護であります。それで釋迦様が今まで四十年餘りの間に、どうしてこんなに大勢の菩薩を教へるといふやうな、こんな大變な働きをなさつたのであるかといふことを彌勒菩薩がお尋ね申上げたのであります。

無量劫の慈悲者なり。いかに大怨と共に
はまします。還て佛にはましまさざるか
と疑なるべし。而ども佛答給はず。

この事は極く大事な問題である、一切の菩薩が、初めも釋迦様が華嚴經をお説きになつてから四十年餘の間、大勢が集つて教を伺ふ度毎にいろ／＼な疑が起きて、その疑に對して問を出して、その問に對して釋迦様が答へになつた。そのお答へになつたのはたゞ菩薩の爲ではない。菩薩の間に答へることに依つて、一切の人間に本當の覺りを與へようといふ考であつたのだから、即ち一切衆生の疑を除くといふ大きな結果があつたのだが、その中に於て今度この法華經に於て、彌勒菩薩が出した疑といふものが一番大事な疑であらう。これは佛が無限の生命を有つて居られる佛だといふことを證據立てる爲の問答であるから、これ程大きい問題は

一切の菩薩、始め華嚴經より四十餘年、會中に疑をまうけて一切衆生の疑網をはらす中に、此疑第一の疑なるべし。無量義經の大莊嚴等の八萬の居士、四十餘年と今との歷劫、疾成の疑にも超過せり。觀無量壽經に韋提希夫人の阿闍世王が提婆にすかされて、父の王をいましめ母を殺さんとせしが、耆婆、月光にをどされて母をはなちたりし時、佛を請じたてまつて、まづ第一の問に云く、我宿何の罪あつて此惡子を生む。世尊復何等の因縁有つて提婆達多とともに眷屬と爲りたまふ等云云。此疑の中に、世尊復有何等因縁等の疑は大なる大事なり。輪王は敵と共に生れず。帝釋は鬼ともならず。佛は

ない。

無量義經の中に、大莊嚴等の八萬の居士が、今まで四十餘年の間の教と、今これから靈鷲山で説かれる教との違ひをお尋ね申したといふことも、随分大きな問題であるが、それよりもモット大きい問題である。又無量義經の中には歷劫といつて、非常に長い間修行しなければ覺れないといふことと、疾成といつて一つの教を信じさへすれば、他のことを習はないでも佛に成れるといふこととの區別をお尋ね申したことがある。これも大きな問題である。

疾成といふのは「疾く成ずる」と書いてあります。が、この疾は「直ぐに」といふ意味ではない、他を通らないでこれで行きさへすればといふ意味であります。この字にはよく間違があるのであります。疾とか、速とか、頓といふ字がお経の中に屢々あります。壽量品の中にも「速に佛身を成就することを得せしめん」とあります。又無量義經の中には「疾

「菩提を得ん」とある。又華嚴經の中などには「頓證菩提」といふことがあります。速とか、疾とか、頓とあるから、このお経を信したらバツと覺れるといふことかとチョット思はれるのでありますが、そんなことはない。若しそんなことを考へたら、それは夢を見て居るやうな話です。私共法華經を何十遍讀んで居りますが、少しも覺れやしない、なか／＼大丈夫どころの騒ぎではない。これは何れも「他の道を通らないで」といふ意味です。他の經典に就て他の修行をしないで、これで行きさへすれば結局佛の覺りが得られる。斯ういふ意味で速とか、疾とか、頓といふ字が用ひてある。それは誤解してはいけません。日蓮宗とか法華を信じて居る人がそこを誤解して、直ぐ覺れるといふから、「法華經を讀んだら直ぐ佛に成ると思つたのに少しも成れない、ナンだ嘘をついたぢやないか」といふやうな疑がよく起るのでありますが、たゞ速にとか、直ぐにとい

ふことではない、他の道を経ないでといふことで、他のお経で修行したのでは容易に覺れない。だから魔劫といつて非常に永い年月経つてもなかく本當に覺れない。法華經といふものはお釋迦様が御自分の信心持を打明けてお説きになつたものだから、これで修行すれば他の經の修行をしないで、これに眞直ぐに行つて、覺て佛の覺りが得られる、斯ういふ意味に取れば宜しい。それなら吾々でも納得が出来る。さうでなければ、直ぐ覺れるといふなら嘘になつてしまふ。少しも直ぐ覺れやしない。しかしこの信心を本當にやつて居れば、これだけで結局凡夫が佛の境界に近づいて行けるだらう。斯ういふことだけは信じて私共も信仰を續ける積りであります。さういふ意味で速とか、疾とかいふので、これが靈鷲山に於ての法華經の説法と、それより以前の説法との違ひであります。

がお尋ね申上げて居るが、それよりもモット、お釋迦様が僅か四十何年に無量の菩薩をお教へになつたのはどういふ譯かといふ疑問の方が、根本的の疑問である。

つて、到頭頻婆沙羅王は押籠められて居る内に、病氣になつて死んでしまはれた。お母さんも殺されさうになつたけれども、その時に耆婆とか、月光とかいふ大臣達が諫めたので、お母さんを殺すことだけは思ひ止つた。それでお釋迦様が阿難といふお弟子を連れて、耆婆希夫人を訪問してお慰めになつた。その時に耆婆希夫人がお釋迦様にお尋ねして言ふのに、どうも今度の事は判らない、「我何の罪あつてこの惡子を生む、世尊復何等の因縁あつて提婆達多と共に眷屬と爲るや」と申した。これは實に無理がないことで、自分達は夫婦心揃へて佛の教を信じて居る。國民を懲んで國の爲に善い政治をして居る、少しも悪い事をやらない。それなのに自分達の子供には阿闍世といふやうな悪い者が出来て、兩親を押籠めて王の位を奪ふやうなことをした。一體これはどういふ譯であらうか、自分は今まで悪い事をした覺えがないのに、こんな悪い報があるといふのはど

又觀無量壽經といふお経の中にも似たやうな話がある。耆婆希夫人といふのは、頻婆沙羅王といふ王様の夫人で、この王も夫人も共に熱心な佛敎の信者であつて、夫婦ともに洵に心の淨らかな正しい人であつた。お釋迦様が太子で居らつしやつた時から非常な望を囑して居つたから、お釋迦様が覺りになると共に夫婦は眞先に歸依して、佛敎の信仰をズット一貫して居つた。又佛敎の弘まることが就ては随分お力をお添へ申したので、佛敎の保護者としては幾人と數へられるくらゐな人であつた。ところがその頻婆沙羅王と耆婆希夫人との間に生れた子供が阿闍世といふ者で、これが提婆達多といふ惡者に瞞されて、兩親を押籠めて自分が王の位を奪

つて、到頭頻婆沙羅王は押籠められて居る内に、病氣になつて死んでしまはれた。お母さんも殺されさうになつたけれども、その時に耆婆とか、月光とかいふ大臣達が諫めたので、お母さんを殺すことだけは思ひ止つた。それでお釋迦様が阿難といふお弟子を連れて、耆婆希夫人を訪問してお慰めになつた。その時に耆婆希夫人がお釋迦様にお尋ねして言ふのに、どうも今度の事は判らない、「我何の罪あつてこの惡子を生む、世尊復何等の因縁あつて提婆達多と共に眷屬と爲るや」と申した。これは實に無理がないことで、自分達は夫婦心揃へて佛の教を信じて居る。國民を懲んで國の爲に善い政治をして居る、少しも悪い事をやらない。それなのに自分達の子供には阿闍世といふやうな悪い者が出来て、兩親を押籠めて王の位を奪ふやうなことをした。一體これはどういふ譯であらうか、自分は今まで悪い事をした覺えがないのに、こんな悪い報があるといふのはど

ういふ譯だらう、この事を伺ひたい。又お釋迦様よ、あなたは一切衆生を救ふといふ大きな働きを有つて居らつしやるのに、あなたの從弟にあたるところの提婆達多といふ者が惡人であつて、お釋迦様の邪魔をしていろ／＼迫害を加へて居る。それではお釋迦様が折角一切の人をお救ひになるといつて善い事をして居られても、善い報がないではないか、どういふ譯であらうか、實に妾の事も不思議であるがお釋迦様の事も不思議である。斯ういふことをお尋ね申上げたといふことが觀無量壽經の中に説かれて居るが、これも非常な大きな疑である。

その時にお釋迦様は御返事をなさらなかつた。その意味からいへば、轉輪聖王といふやうな徳の高い王は敵と共に生れない。帝釋天といふやうな天上の神は鬼と一緒に住まない。佛は無量劫の遠い昔から慈悲の心のある方であるのに、どうして提婆達多といふやうな敵になつて居る者と親類になつて居ら

又人間の生命もこの世だけではないのでありますから、両親が揃つて善い人でも、悪い子供が生れないと斷言は出来ない。その時に、自分達は皆正直なのに、どうしてこんな悪い子供が生れたかといつて歎いても仕方がない。私の慈意な人にもいくらもさういふ人があります。夫婦ともに本當に善い人なのにその子供がとんでもない間違つた子供であるといふ人が随分あります。これはなか／＼人生の事はさう單純に行かないのですから、どこがどう絡つてどんな結果を生ずるか判らない。しかし命はこの世だけの命ではないのですから、どんな災難に遭つても、どんな苦しみに遭つても、それでも自分の信仰を曲げないで貫いて行けば、結局は一切の問題が解決が出来る。こゝに安心を置き、こゝに満足を求めるより外はない、眼の前だけでなか／＼解決のつくものではありません。その事をお釋迦様が仰しやらないで、たゞ佛の道を信ずる悦びをお説きになつたとい

れるか、それでは佛といふ甲斐がないではないかといふ質問であります。佛はそれにお答へにならなくて觀無量壽經の中には直ぐ返事をなさらない、まアさういふことは暫らく措いて、佛の教を信じて本當の道を実行して行くといふこの悦びに代るものはないぞといつて、佛の道を信じこれを實行する、その悦びを説かれたのであります。さうすると韋提希夫人もスツカリ自分の苦痛を忘れてしまつて、あ、さうですか、人生の恩だの怨だのといふものはほんの五十年か七十年の間である。佛の教を信じて永遠に救はれるといふことは、これに比べられないものである。自分の子供がどうだの、親類がどうだの、そんな事はスツカリ忘れて、佛の教を信じませうといつて、悦んで佛の教を聞いたといふのが、觀無量壽經の全體の仕組になつて居ります。

この事は、人生といふものは極めて複雑であり、

ふことは、非常に尊い事であります。それがお釋迦様の口からさういふ事が説かれたから、皆成程と思つて有難いと思つた譯です。けれども問題を解かないでその儘捨て、置く譯に行かないから、そこで後になつて見ると、阿闍世といふ者も、一度間違つた道に足を踏み込んだが、結局悔ひ改めて、佛教の弘まるお手傳をするし、提婆達多といふ者も、非常な惡人だけれども、その惡人がある爲に佛様を初め大勢のお弟子が却て勵まされて、ウツカリしないやうになつたのだから、提婆達多が迫害を加へたのが却て佛教の弘まる因になつた。斯ういふ事が法華經に來て初めて明かになつて、前の問題が根本から解決されたといふことになつて居るのであります。それでありますから、吾々は一體一つの事柄が幸福であるか、不幸であるかといつて穿鑿するのは愚な事です。これを幸福にするか、不幸にするか、それは今からの自分の心掛次第で決めるのです。たゞ過

去の事をクヨクいつても仕様がな。例へば自分の身が弱いといふことは不幸な事ですが、弱いといふことに気がついて養生をして、身を大事にして長く生されれば、弱かつたことが結局幸福になる。それを弱いといつてやけを起して、大食ひをして、大酒を飲んだりすれば、弱いといふことが禍の因になる。だから弱いのが幸福か不幸かといふことは、これから後の自分の態度で決る譯です。貧乏な家に生れたのが幸福か不幸かといふこともそれと同じことで、貧乏な家に生れて来たからといつて、奮發して良くなれば、貧乏であつたことが幸福の因である。貧乏な家に生れたといつてガツカリして、世の中を諦めて首を縊つて死んでしまへば、貧乏な家に生れたことが不幸の因である。ですからすべて人間が幸福か不幸かといふことは、これからの自分の態度で決る。吾々佛教を信ずる者はそこを考へなければならぬ。今の自分が幸福か不幸か、そんな事は小さい

いふ目に遭ふか判らないと思ひます。その時になつて慌てないやうにしたいものです。それを幸福にするのも我が心一つ、それを不幸にするのも我が心一つである、今後の自分の態度に依つて決るのだ、今後の自分の力に依つて決るのだといふ、その根本さへ捉まへて居れば、どんな境遇の中でも笑つて通つて行ける譯であります。これは餘計な事を申ししたやうであります、今の問題もそれで解けて行く譯であります。さういふ根本の心掛を教へられたものが法華經であるが故に、この法華經の教を聽いて、はじめ一切の境遇の中を本當に真直ぐに通れる道が開けるのだといふことを、これからだん／＼説いて行かれる譯であります。

(第二十三講了)

問題である。これを幸福にするかしないか、これを不幸にするかしないか、それは今日以後の自分の態度、自分の心掛で決るのだ。自分の今日以後の態度さへ良ければ、今の自分の苦しみが却て自分の幸福の因になる。自分の今日以後の考が全く間違つた事をして行けば、今少しくらゐる善い事が却て不幸の因になる。要するに根本は、これから後の吾々の態度、吾々の力にあるのであります。吾々の命は五十年や七十年で終るのではない、永遠の生命であるから、これから後に善い事を自分が心掛けて行けば、今までの一切の事が幸福の因になる。不幸に見える事も幸福の因になる。斯ういふことを考へなければならぬ。だから苦を轉じて福とするか、福を轉じて禍とするか、これは今より後の自分の態度、自分の心掛に依つて決るのだ。斯う考へて行くと、今の問題がスツカリ解けて来るのであります。

これからも互が世の中に立つて行く間に、どう

聖典講座

小林一郎先生の講座が、本部に於て毎週左記の通り續けられてゐます。精神總動員の根本的對策は、爰にありませう、お誘ひ合せて御來聽あらんことを。

毎火曜日 六時半勤行、七時開講
但し本月に限り二十日の晩より

統一會館

電話牛込五三三六番

詳細御照會下さい。

日蓮聖人の護法愛國の大精神は、遂に國家諫曉となつた事は世間周知の事實である。即ち法華經を習ふ上に最も注意警戒すべきは護法といふ事である。法華經第二に「若し人信ぜずして此經を毀謗し、經を誦誦し書持することあらん者を見て輕賤憎嫉して而も結恨を懷かん、其人命終して阿鼻獄に入らん、乃至是の如く展轉して無數劫に至らん」涅槃經に云く「惡業の爲に殺されては三惡に至らず、惡友の爲に殺されては必ず三惡に至る」と。隨つて誘身、誘家、誘國といふ三義を辨へばならぬ、誘ひ誘身は就るといふとも誘家誘國の失をどうするかである、そこに正法を惜しみ、國家を大切に考へる者は身を鴻毛の輕きにおいて諫曉の途を擇ぶことが忠なる所以である。詳しくは秋元鈔、富木鈔等を拜されたい。然し暴政として、この大義明分論に對して彈壓を加へる、殊に徳川時代は甚しかった。日蓮門下の蟻蜂は勇しく、殊に不受不施派に於てはこの禁止二百餘年に多くの殉教烈士を出して居る、その一人本妙院日珠師は、寛政五年二月、弟子淨教を伴ひ老中松平越中守に上書し、豫期の通り入獄遂に遠島となつたのである。そこで日珠師は後の人の爲に一書を草して遺された『後諫手引草』上下二巻は、今迄世間に殆んど知られてない珍重の文獻である。幸に小高了海師の努力に依つてこれを掲出するを得たことを敬ぶ。

——滿生——

後 諫 手 引 草 上 卷

本 妙 院 日 珠

嬉哉、後五百歳の記文に當り末法今の時に生を受け、本化再誕日蓮大菩薩の流を汲むこと誠に深縁にあらざられば値ふ事難し、能く持たん事又々難し。痛い哉、法華講誦の族、釋尊

別付の深義を知らず、上行所傳の法に不就事、是惡緣確乎として披難し、故に阿鼻の焰をまねがれざる事を依てうらみ依て歎く。且宗祖の大悲を仰ぎ見れば、猶大恩深高にして滄海

須彌も物の數ならず、感涙を催して二六時に忘るゝ陳なし。是を以て恩祖の種を追ふて刑戮を不顧、免脱三失の大願を發し、武昌戴評の政所に來り撥邪興正の政をとふ。故に諫居の難を蒙り將來の歡を増しぬ。敢て言ひ敢てすゝむ、攝折二門の中には折伏門なり。而已應時の正行倦む事なく、自他善善の素懐なり。

爰にひとりの賢子有り、予を追ふて又諫の意を問ふ、答へんも又喜びにして聽かすも又更なり。龍蓮微子は古の賢人、世門の諫吳羽綾羽はむかしの通便現世の手引、今の贈答は是一大事の諫言なり。是故に一子を局らず後代諸賢の手引ならんかと、吾來りし道筋に草結ひして侍らんと、いやしき水華をかき集めて送遣んが爲に題して兩言ふ。

雜書文化 丙 實載臘月佛誕生日識之。

抑拙僧公場の出立は、寛政五年癸丑二月廿八日に、江戸馬喰町一丁目旅宿藤田屋藤七郎方へ相泊り、此所にて二夜令逗留候。翌廿九日藤七へ相頼み、明朝六ツ時社奉行所へ用事有之に付罷出度候、草履取一人、挾箱持一人、都合相頼申度候の間、能き人を見合履被下候様、尤齋齋等は所持不致候間、詮方令支度參候様に頼入候。月番の御奉行は何方にて候哉、一寸閉合頼入候よし申候處、早速開立、月番は臨坂淡路守殿

にて御座候由申候。

扱又翌晦日早朝、宿錢並人足賃迄令勘定、節句前に候へば定て入用も可有之候あいだ、先々此分請取置被下度候へとて相渡置候。奉行所へ指出したるものは、大挾箱一つ其中へ諫曉書卷ものに相認め箱に入、外に副啓一冊是は又篋に入れ、此二箱一結に重ね又大箱におさめ、尤も覆蓋に致し候様相調へ、臺と共に挾箱に相納め置令持參候。殘挾箱一ツ、糞笠小筒等は其儘藤七郎方へ預け置、淨教並供貳人召連罷出、臨坂淡路守殿門前にて、京都本妙院と呼せ候處、門番より御客と呼、玄關番へ相訴へ候間直に式臺に通じ、献上もの持參致せよと淨教に申付、早速指出し候處、玄關番の侍申候には、御名御所書被成下候様にと硯箱并折紙を持參致し候間、某中には別に名所書を致し候には及び不申候、中に委細相認め置候間是を差出被下候得ば相分り申事に候と申聞候得ば、然ば何分別席へ御通り可被成と申。併拙僧別席はいづ方やら不存候故見合居申處、玄關の侍申は當所へ始て御出被成候哉と尋ね候故、左様に有之候。然ば御案内可申とて式臺を遙々奥へ通り候處、入口には惣席とて二十餘計敷候座舖有之候、其一間奥へ別席として是も廿疊計の座席にて候此處迄誘引有之候。然るに拙僧は別席に位長高に成居申、淨教は惣席へ差置候。小遣の小侍等煙葉盆、或は茶など持參せしめ候。然れ共

其節は大願成就の爲、煙葉は禁止致し有之候間給不申、只淨教計給申事に候。將又五十四五の侍袴計り着して、又右の通硯箱折紙等を令持參、御名まへ御所書被仰付候様にと申來候。又某申には何も別段に書申には不及申候旨答へ候へば、硯箱等其儘指置立申候。又々小僧使と申役の侍袴羽織にて罷出、又右の通御名前御所書を被成下候様願上候旨申參候。某申には先刻も申上候通り、別に致候には及不申候由答候故、又其儘相退き候。其後は公用人と相見へ候もの上下を着し罷出で、御名御所書を被成下候様願上候由申候。又某右の通りに答へ候處、然ば銘々共は輕者なる故、御名前御所書等も委細御聞かせ不被下候哉。是に於て某申すには仰の通り輕卒には難申事候、何分委細の儀は淡路守殿へ御目に懸り直に御達し可申候。其時此侍被申候には、何分御箱の内には何者か入候哉、其段荒々御聞せ可被下候、殊更御名御所書等も相知れ不申候ては譯り不申候、京都と計被仰候ても京都は廣き事にて候へば、何といふ所、何といふ寺と、委細に御書付不被下候ては、主人の前へも難差出候、主人も相知れ不申候ては困り申事に候。其時某申すには仰せの儀御尤の御事に候、箱の内には卷軸相認め有之候、何分其儘主人に御差上宜しく御披露願上候、此卷軸を御披き有之候へば別には拙僧申には及び不申候、委細の儀は相譯り申候。然ば此侍も退き被申候。良暫

く有之又右の公用人罷出被申候には、至て御内々の儀と存じ候間、此席にては遠慮も思召候哉、何分鳥渡御一人計此方へ御出被下候様申候故、然ればとて拙僧罷立、同道にて別の座敷へ參候處、公用人の曰く、別の儀にては御座なく候、大僧正の御身の上にて有之候哉如何は存不申候へ共、拙者共今日御役を相勤め候へば、手を下げて御挨拶被下候様願上候、左様無之ては拙者共役前が相立不申候。其時某には成程御尤千萬に存候、乍去押拵と申儀にても無之候へ共、惣て出家たるものは俗人を尊敬する事、却て罪科を相與へ候事に相成候旨、平日相心得居申候故、何の辨へも無之手も下げ不申事にて候、何分仰せの儀御尤に候間致承知候の旨答候。されば此等の侍方は、拙僧の前へ來りては兩手をつき頭を抵れ挨拶挨拶分丁寧に有之候へ共、拙僧義は少しも頭を低れず、まして手をば下げ不申、左の手に珠數を懸け、手を膝の上に置き、右の手に中啓を持、唯落着たる心持にて致挨拶居申候故、如是被申事に候、是よりは頭は低れ不申候へ共、併兩手をば膝の下まで下げて挨拶におよび申候。猶又公用人被申候には、御名御所書等御隠被成候事甚不審の至に存候、寺院方の内にも不埒の筋有之故、御訴訟の筋にて若哉御名所等願ては不宣と思召候事に候はゞ隨分相隠可申候、何分深く御慎の義は如何様の事にて候哉、且又當時法華宗の内不受不施と申流有之候

旨承知仕候、若哉此等の義御願の筋にても有之哉鳥渡御尋申上候。其時拙僧申すには、左様御尋有之候はゞ何慎可申、拙僧は不受不施の沙門にて候、當時の法華宗は受不施法華と申して釋尊の經文に相叶不申、宗祖日蓮の本意に相背き申候、依之一切衆生隨地獄の根源にて候へば甚敷々敷存候、且又此國に生を受け候へば國恩を蒙り候へ共報すること難し、然るに念佛・眞言・禪・律等を歸伏して、剩へ受不施法華の邪宗を御荷擔有之、正法たる不受不施の立義を御見捨被成候事誠に本意に非ず、悲歎の至りに存候、是を以て國恩を報ぜんがため、身命を捨て、大君尊前を諫曉し奉んと欲し此御館迄罷出候、何様宗義の節目御糺明の段可然候様に御披露願上候。其時又公用人の曰く、御指出し候箱の上も松平越中守殿と御書附被成有之候、是は直に越中の守殿へ御持參の儀可然事に候、何故にか此方へ御持參にて候哉。某申には仰の通り不審御尤に候、越中守殿へ持參可仕事に候得共、是は献上の品物にて有之候間、道を正し禮儀を相心得御奉行所迄持參仕候、御奉行所より越中守殿と御内談の上、大君尊前へ献上可被成下候様に存じ御奉行所迄持參致し候事に候、則箱の内には法華眞正行と申す諫書一卷越中守殿へ別啓一冊相認め有之候、何分其段宜敷やうに披露願上候。其時公用人被申候には、坂献上と有之候へば主人は御取次役に候間隨分承知仕候、併京都

のいつかた、河寺、誰と申儀委敷相知れ不申候ては、主人も御取次申事難致候間其段御記し可被下候。又某申には先刻申し上候通り別に子細無御座候、京都と計被仰候はゞ箱の内御披露被成候はゞ委細の義相譯り可申候、何も別に申上候に及不申候。公用人の曰く、しかれば無宿體の義に有之候哉、仰の通り左様に候。公用人の曰く、然らば相譯り申候、唯今御奉行は登城の留守にて有之候間、追付相歸り可被申候、何分より表役へ相達し申候、夫迄は御扣へ御休足可被成候。爰におひて拙僧一寸御願有之候由申候、今日の供二人召連れ參上仕候、此二人のもの共は何もぞんじ不申者にて候間、二人共早々御戻し可被下候、其段願上候とて令退座候、元の別席へかへり扣へ居申事に候。其間に見申候處、或は出家等立替り入替り訴訟願等に相見え申候、乍去宗跡ヶ間敷願の者は一人も相見ず、或は公事口論、或は境論普請の願、或は勸化、或は印形手形の事金銀貸借等の筋にて參ることに相見へ候。其時情々拙僧觀念するに、斯如奉行所へ數多の人訴訟願に參候へ共、法義につき參候者は無之、世間名聞の事に參る者哉と。然るに我々事は、宗義殊に法華經のおんために此處へ來る事誠に希有也、優曇華の如し、如何なる過去生の因縁にて有之事哉と感涙相催し難有事無限、猶々心も丈夫に相成、唯心中にて三寶宗祖大菩薩を御祈念奉る事にて候。

扱々是迄入込候事のみ大いに心痛致し様々と工夫せしむる事にて候へ共、思惟の如く安々と此座席迄來り、公用人迄委細申達候上は本懐相契ひ候事にて、最早此上は如何様に相成候共不若、宗義の骨目を申達候はんと觀念致し、淨教と只二人計内談申計にて候、歡喜難堪益々心法堅固に相成候。人の透間を見合、紙入より私に一步取出し小袖の縫目へ押入隠し置き候。是も兼て入牢のせつは釣とて中にて入候旨承及候間、其心得にて淨教ともに申合せ左様に工夫致し候、各々達にも若しや入牢のせつはかね、其用意可有之候様可被相心得、尤奉行所にて着物帯禪に至る迄委敷相改め有之事に候間、大金は必ず、無用一步か二歩より上は決して御持參被成間敷候、穿り當候はば直に取揚に相成候間、着物が帯かに入置、いかにも知れざる様に致し置き牢内にて相違ひ可被申入置、皆是牢内の用心金にて候一步か二歩かにて宜しく候、必ず必ずそれより上は着物の上にて入候事御無用に候。奉行所のあらため、牢屋敷の改め、右二ヶ所にて相改候間、随分工夫能く可爲用心事に候。

猶又晝にも相成晝食時分に候へば、御退屈有之とて握食五つばかり小盆に入、香のものを相添へ、搦僧淨教二人計りの所へ別々に相出し被申候。袴着たる給使人茶杯も運び被申候、併心中歡喜限りなく候間左のみ空腹にも不覺候故、只一

を報じ奉ることは、法華經の道理を勤め奉る義より外に過たる事は無御座候、宗義の筋目御礼明被下候はば無此上難有御事に候、若御意に不相叶候てたとへ流罪死罪に被仰付候とも不及是非、不苦候の間達て此趣を奉願上候、何分宜敷様披露願上申候。其時淡路守の曰く、御法度の義を知りつゝ違つて願を申すこと不届の至なり、定めて其法類も可有之候間、石を抱かせて嚴敷吟味を致し根を斷ちて葉を枯すべし。其時某の曰く、如何様共御勝手次第に御吟味可被仰付候、法華經の御爲にて候へば少しも驚くことは無御座候、今如何様に相成候共兼て搦僧は覺悟にて有之候。淡路守の曰く、然ば吟味中入牢申付ると有之候、其時某并淨教後らへ二人の同心立寄り、上の様より白砂へ引下し、袈裟衣を剥取、青細引にて縛り申候。尤も出家或は女中或は武士等の繩目は腰繩にて、只小手を括り帯に繩を通し縛る計りの事にて、平俗の繩目は本繩にて有之候。しかれば夫より如何様に相成候やと待居候處、吟味場の白砂の溜り戸を明て其内のしらすへ引入れ躁り戸を引閉、其内にて繩を解き裸に致し着物を一枚づつ改め候、上の座席には公用人或は大儉使、小儉使の役人とふ並び居て硯箱折紙をひかへ、搦僧并淨教と二人の懷中諸色等を一々に相改め目錄に書留候。誠に禪迄をはづし改申事に候、てぬぐひも一つを二つに裂き半手拭に致し、搦僧并淨教へ被下候事に候、

ッ給候て殘し置、給使の人へ相頼近頃失禮には有之候へ共殘し置き候分、搦僧が供の人へ御遣し被下候様頼入候段申さし残り、それより段々待居申處、九ツ時分にも相成候へば廿歳ばかりの小侍罷出、一寸御兩人様共御出被成と申呼に參り候故、淨教を召し連れ參候處、白砂のうへのゑん薄縁敷有之候其所へ合誘引參り、申すには此所に手をついて御入候はば、則此内座敷に御奉行被爲出候間左様に御心得可有之と申合置、又又本の別席へ合歸誘候。それより今や、と相待候處漸く八ツ過にも相成候へば一間へ呼び出し、珠敷扇或は懷中の品物とふ公用人預り候間相渡置候。然して白砂の縁に罷出令蹲踞候處、一間の内に社奉行臨坂淡路守殿出居有之候。

奉行淡路守殿の曰く、日珠并淨教此度願の趣き不受不施の義は、御法度の故に願の筋は相叶ひ申さず、但御法度の義をば定て知らずして被願出たるや、大分左様に可有之。其時某曰く御法度の義は随分承知にて居申候、併御法度に相成居申事如何の義にて御座候哉、當時の法華宗は釋尊に違背し奉り、日蓮の本意に相叶不申候間何卒日蓮の本意を相達し申度、國王の御恩を報じ奉らんために生命を捨て罷出候間宜しき様に御披露願上候。淡路守殿曰く、國恩を報ぜんと思ふ事外にも何ぞ可有之、御法度の義を不申立ともよかるべし、心得違にては無之哉。某の曰く、全く心得違にては無御座候、國法

足袋并絹股引とふ履居候處是も爲取揚に相成此目錄に相書候。品物黄金の立像釋尊一體尊像一寸蓮臺八分以上唐銅の祖師尊體一體尊像一寸二分計量、一寸八分蓮臺は銀、二つの鬘子に入られ、又其鬘子を一につに致し搦僧細工に紙にて張披に拵へ、錦の切れにて上を包張にして唐眞鍮の金具を打ち懷中に致し所持候様に拵へ置候、右此尊像一具、師匠音應院より譲りの一部一卷御經一折並譲りの御符書一冊、日興家人四つ切御本尊一幅、紫の袈裟一服、黒縮緬の衣一服、黒檀の珠數一連、中啓一本、花色本羅紗紙入一つ、内には金銀藥類沈香人參等其外種々品物等も有之候、印籠一組、銀筒梅枝花筒、根付黒檀牛に唐人の乘、緒封瑠璃本玉、緒は紫紐なり、右此印籠は照妙院より智元へ被讓候品物なり、それは搦僧國出立の時分智元より錢別に囀候間令所持に候、足袋股引とふも取揚に相成候、大袈裟一つ、是は禪書類箱、先之等の品類相改目錄に書留奉行所へ預りに相成候。此義相濟みて又右の通に繩を懸、白砂の外へ小頭並同心の休息所有之候、その所に薄縁をしき二人ともに置候、夫より白砂へ呼出し下の板様に居置候。平生體の俗人は白砂の小石の上に直々の居置候へ共、出家侍等は小石の上には置不申下様に置、上の椽には吟味役座被申候事に候。

借之より留役の懸りに相成候、留役とは則寺社奉行所勘定奉行等の吟味役の事に候。留役の曰く、御法度の不受不施をば何故か被相顧候哉。某答曰、國恩を報ぜんが爲めに相顧申候。留役の曰、不受不施とは文字は如何書候哉。答曰、不受不施とかき申候。留役の曰、受不施すと書ならば露命相續は何を以て被致候哉。答曰、佛法に就ては世間出世の二途有之候、世間とは世間通用の儀慈悲仁義の受禮にて候、此等ば受も致し施しも致候事に候、是故に不受不施と申事は、世間通漫の指令の筋には無之候、又出世と申は佛法の一大事に候、此故に他宗の供養をば一向請不申候、又他宗の堂塔佛閣神社とふへは致參詣候事を堅く相禁め申事に候、又他宗へ供養等或は佛事等に附て布施勸物を施し候事又請候事決して致し不申候、是をもつて不受不施とは申事に候、慈悲を以て施し、恩顧を以て施し候事は、相互に請も致し施も致し申事に候、是故に諸人のもつて露命相續致申候。留役の曰、廻向祈禱は被致不申候哉。某答曰、隨分朝暮相續申候、但布施等取りては相續不申候、唯拙僧の慈悲を以て相續道す事に候。留役の曰、日蓮も他宗の施をば被請不申候哉。答曰、日蓮大菩薩を始め、代々高德の先師皆以て他宗の供養をば請不被申候、委細の義は指上候巻軸に相註し有之候、御覽の上御合點不參候事は拙僧へ御尋被下候はば委細可申上候、日蓮は既に種々の

大難に値給ひ候事皆是他宗を折伏候て、他宗の施を受給ざる故にて候、何事も御尋の上御答可申上候、日蓮は釋尊の夙勅を蒙り、身命を捨て法華經を弘め給ふ御事に候、其大切の正法を二百年以前、日乾・日遠と申僧相破候故、夫より以來其流を汲候當時の法華宗は、誠に他宗同様に行成候、其段祖師代の高徳の御本意を思ひやり候へば、拙僧思ひ難堪候間身命を捨て罷出候、邪正御札明の程願上度事に候、何分宜敷御披達のだん願上申候。其時留役の曰、成程宗の筋目尤の義に可有之事に候へ共、何分只今は御法度に相成候上は、善とも惡とも夫には御構無之候間願上の義は相叶不申事也、併法類等も有之可候委可被申上。某曰、法類とふは外には一人も無之候、唯拙僧一人計りに候。留役の曰、然ば淨教と申す者は如何。某の曰、拙僧の弟子にて候。留役の曰、其元師匠は。答曰、普應院日恩と申候。留役の曰、宿は何方に被泊候哉。答曰、馬喰町一丁目藤田屋藤七と申者方に泊申候。留役の曰、是は知るべにて候や。答へて曰、一向知る人にては無之候、何方へ可泊やと往來見合居申所、此方へ御泊候へと引歸候故泊り申事に候。留役の曰、しかれば故宿屋にて候哉。某曰、大方左様にて候。留役の曰、所持の品物は預り置目録の通りにて有之候哉。答曰、左様にて候。留役の曰、故宿には預置品物は何も無之候や。答へて曰、品物御座候。留役の曰、何

何有之候哉。答曰、挾箱一つ、其中に書籍類着物類其外種々の物御座候、又他にも小筒或は蓑笠等御座候。留役の曰、金子は無之候哉。答曰、金子も拾七八兩御座候。

爰に於て留役の曰、其元は先々退き休息可被致と有て同心引立、白砂の外へ連れ出て同心の休息場へ置故休息致し居申事候。是迄の吟味は拙僧一人にて候、それより淨教を白砂へ呼出し吟味にて有之候、乍去淨教は聲と申立、聲に相成何も委細不申由にて有之候故、早速拙僧居申休息場へかへり申候。兩人共暫くの間に此處にて休息せしめ候内、小頭並同心二人番を致し居申候間、留役の名を尋候處、星野鐵三郎と申由候故留役を見知り申事に候。扱此休息の間に小頭並同心方へ對し、經釋并御名判を引、折伏致度と法門杯と説聞せし處、奥へ聞へ候間靜に御談被下候様、私共も法華宗にて御座候へ共、所詮私共相持ち候法華宗は本意の事にては無之候、御前様がたの御持ち被成候事はこそ實の事にて候、今の寺方は取に不足事にて候、乍去私もとは俗の身分殊に役義を相勤候得ば、何事も是非に叶不申とて拙僧が説聞する法文を矢立より筆取出し、一々に書付難有事に候等と令敷喜跡に相見え候。如是殊勝に被思候上は廻目も強からず、何事もねん比に相當り呉れ候事に候。同心の曰、御前様方は大に御仕合にて候、獄屋へ被遣候はば大いに御難茲にて候が、揚り屋へ被遣

候趣候間御安心可被成候、揚り屋へ御出被成候はば、此間二本覆より高野山の出家了惠と申僧此方の係にて參り居申候間之を御頼御懇意に可被成候、年杯も五十計にて隨分質成何事も御力に相成可申候、何分半屋の事は私共は懸りが違ふ故敷敷事は不存候へ共、惣別恐敷事共有之候由承居申候間、便方なる人に何事も御聞御頼可被成候と、さも念此に言合られ候事にて、新様に質成役人に相懸候事は誠に拙僧共の仕合にて、偏に三寶宗祖の御影にて候。末法は惡世の事にて候得ば、如何成惡人の手に懸り、理非善惡も無非道にして怨憎候へ共、仕方なき事に候、惣じて役人は時々之の機々に候間、如是拙僧が時に柔なり共、又餘の僧の時に柔頼なりといふ定めは無之事に候間若役所へ出候時は、惣別役人は六ヶ敷もの、をそろしきものと相心得て可被致出場候專要にて候、常に左様に相心得居申候へば、若しや役人無理非道の責め致し候とも、少しも驚く心は無之、退心無之事に候。常には法華經の御爲に命を奉ると思ひながら、其覺悟無之時は、その場に至り候時、心驚き悔む心出て非道の事やとて役人を悔む心など出來り候ものにて候、必ず法華經の行者は、常に謗法人は毒氣深入の故に非道の事可致ものとのみ心定めて可被居候、若其謗法人の内にて柔和の人に合候事は銘々の仕合にて候、其出合人も法華經の行者を強く不責事は其人の仕合に

て罪科淺き事にて候、之らの相互の仕合にて候、若し理不盡の責に逢ひ候はば相互の因果にて候の間、その覺悟少しも油斷無之様可被致候。

扱て又夫より呼出有之、此時より後は拙僧淨教始終一所に白砂へ呼出しに相成候。留役の曰く、只今藤田屋藤七郎を被召寄御尋有之候處へ、一向知る人にては無之旨双方口上合候間その義相分り候、然ば藤七方へ預置品物等、只今藤七致持參候間改めの上奉行所へ御預可被成候間、見分可致とてまたまた内白砂へ呼入候處、藤七に對面、扱此間中は何角御世話添ぞんじ候、拙僧願上の義有之候故願立候處、如是の次第何も知らず其元まで御奉行所迄呼寄扱て、氣の毒千萬無面目事にて候、右預ヶ置候品物御持參の旨と令挨拶居申所へ挾箱小筒等取出、夫々品物書籍金銀等に至る迄不殘被改之通相違無之やと有之故、相違無之旨申達候。夫より藤七へ逆も是切にて對面致すまじく候間、内方へ能々御禮願入候と取返しに相別表白砂へ罷出候。留役曰、廿八日には藤七方に泊候段相分り候、其前日はいづ方へ被泊候哉。答曰、覺不申候。留役の曰く、東海道にて候哉。答曰、多分木曾路の様に覺え候。留役の曰く、木曾路ならばぜん日定めて板橋にて可有之候哉。答へて曰く、何と申所やは覺不申候。留役の曰く、道中致し候哉がそのとまり、を不知して相濟むべきや、虚言申

間敷との事に候。某の曰、虚言は不申候、その故はケ様委しく泊りまで御尋ね可有之事にて入用も可有之とぞんじ候はば隨分心をとめておぼへ居申事に候得共、拙僧事は師匠の兼ねて道言にて、某ことは逆も老年に及び候間大願成就難達事也、何分其方諫院相勤め候にて有之、それ故只今迄相心懸居申處、漸く此度思ひ立ち罷出候、此度の大願大切の事にて候へば、道中筋も只御題目計奉唱、餘の事は一向こゝろに留不申、此大願成就のみ心に思ひ參り候故一向に覺不申候、晩方にも相成候へば御泊り被成々々と呼かけ候故、見分此宿よく候半哉と存る處へ泊り申候、泊り候ても一宿切の事にて候へば、其外に入ること有之まじく候と所も宿號も名も相尋不申候、其故一向覺不申候、如是相答候事は留役より前日の宿被尋始候間、拙僧不圖心付一宿申出候へば又其次の宿被尋候必ず定なり、然ば其末迄だん、尋盡候事六ヶ敷相成候趣と存じ候故、一向覺不申とて事少く相成候に申たる事に候、後諫の人かならずかならず其心得可有之候。留役の曰、其元、歳は何才にて候哉。答曰、三十一歳にて候。留役の曰、淨教は何才にて候哉。答へて曰、六十四歳に相成候。留役の曰、住所はいづ方にて候哉。答へて曰く、住所は無御座候、五畿内の中致修業、別ては京都を修業仕候得共住所の定めは一向無御座候。留役の曰く、本妙院とは別院にては無御座候哉。答

曰、惣て出家にては院號申候我名前の持まへにて候、依之本妙院日珠と申候。留役の曰、本妙院と名乗候時寺號の様に紛敷候、名にて候はば日珠と計り申して然るべし、定めて日蓮の日の字を方どりて日珠と名付可被申哉。答曰、左様にて有之候。留役の曰く、淨教事は日蓮は無之哉。答曰、日得と申候、乍去初心のうちにては日蓮をば憚て呼せ不申、其故淨教と計り申候。留役の曰、京都は何方にて候哉。答曰、幼少の時出家致し候故何方と申す事確と覺不申候。留役の曰、何才の歳に出家致され候哉。答へて曰、七八才の時分と覺申候。其時留役曰、七八才と申しては相譯り申さず、七才ならば七才、八才ならば八才と極て被申。某曰、左様ならば八才とでも御留可被下候。留役の曰、然ば八才とて被書留、八才にも相成候へば不知事は有まじく事なり少々は聞覺も有之べく。答へて曰く、鳥羽とやら申様に覺居候得共、是とも確とは覺え申事にては無御座候。留役の曰、然ば鳥羽と致す可しと被書留、父は何人にて名は何と申候哉。答曰、父は浪人にて候が、拙僧事は母の胎内に居申内、父相果候故出生の後母の養育に預り、去ながら幼少の時母にも相別れ候故、何角の事一向覺不申候。留役の曰く、母の名は何と云ひ候哉、何才に相分れ候哉。答曰、幼少の時に候へば加様加様と計申候故、母の名も覺え不申候。留役の曰、別れて後は母に對面

無之候哉。答曰、幼少の時死別に相成候ケ様に出家を遂候事も兩親菩提の爲と存じ令修業事に候。留役曰、母死して後は何人の世話に相成候哉。答へて曰、母死候二三日前に出家被參、逼留にて病氣の介抱杯致被下候て母病死の後は拙僧を直に召れ歸られ候、其出家と申は拙僧師匠にて候。留役の曰、それは母存世の時より内約束にて有之候哉。答曰、幼少の時分の事にて候へば何も存じ不申候へ共、定めて弟子に可致約束にては御座候敷。留役の曰、夫より何方へ被參候哉。答曰、何方とも無定、所々へ召れ被參修業被致候。留役曰、其後兩親の墓處へ參詣致候哉。答曰、一向不申參候。留役曰、其は甚不孝の事に候、出家にも相成候身分として親の墓へも參詣する事を知らざる事甚不埒の義也、某曰、幼少の義にて候へば、師匠の側を少も離れず常住供を致し、殊に其節は五畿内の内にては遠方を召れられ候故參る事不相叶、殊に幼少時分に候候ば親死候後は孝不孝の辨も無之、只愛せられ候師匠計戀數ぞんじ一寸も相離不申、其後七八年も過ぎて鳥羽を尋候へ共、元より浪人位の者にて候へば何事も一向相知れ不申、夫れ故一向願所も存不申候。留役の曰、成程左様の義可有之尤の事なり、先々相下り可被致休息も有之同心引立白砂の外へ出、休息場へ參り候處早や晚七ツ半過にも相成候處、休息場に於て夕飯等を被下、日光膳にて黒塗の椀平

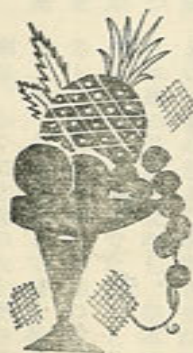
香物汁等の膳分にて塗飯次に上白の御飯被下、給使人なども相添湯桶に飯の湯なども入れて丁嚙の事にて、其後に罷出候日も同じ此通りの膳分にて晝飯と夕食と兩度づゝ下され候、如是寺社御奉行所は甚丁寧の事にて、夫より日暮候て燭臺或は提燈等を燈し立呼出し吟味始り申候。留役曰、淨教事生國は何國にて候哉。某曰、近年大きにのぼり候て甚耳遠く相成難聞候間、御尋の義は拙僧へ可被仰聞候、生國は攝津の國のよし申候へ共委き事は相知不申、かれが話しに前方承り候處拾子にて有之よし、人々の情にて成長致し方々を馳せ廻り年月を送り候段物語にて候。留役の曰、弟子には何比より相成候哉。某曰、五六年以前に候。留役曰、五六年と申しては相譯り不申五年か六年か、其時某少し勤へて曰、多分五年計りにて候。留役曰、夫迄は渡世何を致し候や。某が曰く、賣藥等渡世に致し居申由に承り候。留役の曰、何の故に其元の弟子には相成候哉。某曰、五年前六月、祇園會の時分涼み旁旁見物に罷り出で候處、水茶屋へ立寄り腰懸にて煙草給居申候故、當宗の法門等説聞遣候へば殊の外難有がり、此者申には、夫に付私も所持仕候御守有之法華宗の御守にて候御覽可被下候とて、頭より脱し守袋より取出し拙僧の所へ差出し候故、早速披き見申候處、不受不施の道理を磨れたる妙覺寺の日奥聖人の御眞筆にて候間、惜々之は我々が大切に致し

申御本尊にて候と申候へば大いに驚き、扱それは如何なる因縁にて候哉不思議の御縁にて候と、それより段々法門を聞込師弟の契約致し、拙僧に隨ひて令修業事に候。留役の曰、其本尊は誰に囑候哉。某曰、渠が親分の者病死の節大切の守の由申傳譲り吳候由に申候。留役の曰、其親分の者は何方にて病死致し候哉。答曰、拙僧義は一向存じ不申候、三十年計跡に病死致し候由五年跡に拙僧が弟子に相成候せつ嘶候間夫故承り覺申候。留役の曰、其本尊は如何致候哉。某曰、渠が所持の本尊にて候。留役の曰く、剃髮は何方にて致し候哉。それがし曰く、五年跡の秋頃に大津の村はづれに少き小屋有之候故、夫へ一宿仕候、其小家にて剃髮致し候、則拙僧香刺の儀式相勤遣候。留役の曰、秋頃と計にては相分不申、何月何日と明白に可被申。某曰、九月廿五日にて候。留役の曰、夫は家内も有之候哉。某曰、八十計の祖母一人居申候外に家内らしき者相見不申候、夫故幸^{さう}靜にして宜敷候と存じ其家にて剃髮致し遣候、其後一ヶ年半程過ぎて大津を通候故又禮旁々に相尋候處、死候哉小家の跡形も無御座候、其近所らしき處を相尋候得共一向様子相知不申候。留役の曰、今夕は先々相下り可被申と有之、同心引立て休息場へ罷出候處、乗物二丁参り有之候故、早速小用等相連し直に乗物にのり候へば昇ぎ出し候、駕籠一丁先拂に足輕棒突二人宛にて提燈二張づゝ

同心一人宛、駕籠昇四人宛、以上二丁乗物に十八人、外に小檢使と云ふ役の侍袴羽織草履取袂箱持等召遣供通り賑々敷して相添へ、天滿町牢屋敷まで送被申畢ぬ。

扱牢屋敷門前迄参候へば、供の人高々と牢人と呼り候、其時大門開き内へ昇込候得ば、役所の玄關へ小檢使は上り、駕籠をば二丁共玄關に据置候故入牢今や今やと待ち居候處、暫くあつて牢屋役人並に小檢使共一所に玄關より罷出で、是は書送は無宿にて候へば牢屋敷へ可被遣事にて候得共、思召有之揚り屋へ被遣候様の事に候、何分其段御勤辨可然候様御取計願入候、但し師匠の義は候間御引分被成置候様頼入と有之趣、乗物の中にて身を傾て聞居候事に候。牢屋敷は石手帯刀と申旗本、知行は五百石此人の預にて候、屋敷は直に牢屋敷と並て居申候、其下役同心五十人、張番とて牢屋敷の小遣人三十人有之候、右帯刀組下牢屋鍵役橋本藤右エ門と申同心請取候へば、奉行所の役人遣は相渡し置歸り申され候、其より兩僧懸りの所を聞き、名を聞き、歳をきき候て、淨教をば百姓牢へ昇ぎ込、拙僧をば内大門を開き牢屋番所の前まで昇込み、籠より出でて西揚り屋の外箱にて滑り戸を明けて西箱の中に入れ、當番の同心並鍵役藤右エ門等の役人不殘箱の内に遁入、跡に鍵前を却し立合にて牢屋敷小使の人は張番といふ、此張番拙僧の繩を解き探に致し着物并帶禪迄細かに相改

め、又元の通りに着物をきせ帯をさせ揚屋の戸口へ連れ行き、揚屋の名主を呼、鍵役の曰、揚屋の名主は臨坂淡路の守殿の御懸にて法華經の日珠と申者、不受不施の願立につき入牢被仰付たり、無宿にて参候間獄屋へ可被遣事なれ共、思召有之揚屋へ遣されり随分大切にいたはり遣せと、申渡し、揚り屋戸の鍵まへをはづし、戸を引き開け内へ入れ提燈の照明を見せ、最早夫れで宜敷かとあつて戸をびつしやりと引立て、鍵まへを却して歸られたり。



左記は、我等同志福岡、種村二班長を送れる同心會の爲めに、客月八木沼總班長一夕の懇談要旨である。(文責在記者)

宣撫班を語る

八木沼丈夫

新東洋の礎石

つはものの血潮したるこの道を

われ等三たび軍にしたがふ

北支中南支の土には、皇軍の血潮が惜しみなくそゞがれて居る。この尊き土の中から、新しい支那が生れなければならぬのである。今まで幾千年の間、天災に痛めつけられ、軍閥に搾取され、近くは列強に帝國主義的侵略と、赤露の共產思想とに蝕まれて、何處へ行くべきかを知

らぬ暗い生命に曝されてゐた支那の民衆は、今こそ盟邦日本との強き融和にまつて、恵み豊かな新しい太陽の下に立たねばならぬ。

この新しく美しい東亞を再建することが、今次聖戰の目的であつた。この目的を達する爲には、敵軍閥を粉碎する強烈な武力と共に、一方無辜の支那民衆に光と恵とを與へる優しい手がさし伸べられねばならぬ。

この仕事を身を以て遂行するのが宣撫

二種の宣撫班

班の責務である。班員達は、或は硝煙の下を滑つて、兵團の戰闘に協力し、或は荒廢の街に立つて民衆の宣撫に當るが、その場合彼等の頼みとするものは、唯だ人間の魂から魂に通ふ「まこと」一つである。このまこと一つを信じて、來るべき明日の東洋の礎を築いて行く武器なき戰士——宣撫班の使命と、現況に就いて簡単に述べて見度い。

宣撫班に二種ある。その中の從軍宣撫班は兵團に屬し、軍と行動を共にして軍の作戦に協力する。次に後方宣撫班といふのは、特務機關に屬して軍の占領した領域の治安に任ずるのである。

軍の行動を自由ならしめる爲には、糧食の補給とか、架橋、通路の修繕とか言ふことが非常に大切であるが、これ等に要する人夫を集めることが第一に宣撫班の任務である。

又、戰場となつた良民をもとの生活に立復らせなければならぬ。それには戰禍に慣え戦いてゐる民心を安定せしむることが第一だ。激戦の地に残つてゐる民衆は、悉く無辜の良民である。

今まで國民政府をかさに着て威張つてゐた官吏、民衆の膏血を搾つてゐた富豪などは、身邊が危険になると眞先に逃げた了ふ。そして貧民や老幼不具者だけが逃げるべき金も無く、亦何處へ行つてよいか分らずに、取残されるのであるが、

その彼等も穴に隠れ倉に入つて、何處に居るのか全で分らないといふ状態である。

その支那軍は、今度の戦ひでは所謂ゲリラ戰、「堅壁清野の計」を徹底的に行つた。その敗走するに當り一切の物を掠奪又は焼却破毀して、敵に一物をも與へないといふ。この憎むべき方策の爲に、皇軍占領地帯の物質は極度に缺乏してゐた。

ことに昨年は非常な水害で、猛烈に進撃する我が將兵は食物も無く、生の薩摩芋を嚼つて飢を凌ぐことも度々であつた。かういふ天災戰禍の中にあつて、如何にして軍隊に物資を供給し、民心を安定せしむるかに就て、宣撫班は常に周密果敢なる活動をしなければならぬ。

前線での活動

宣撫班の第一の仕事は先づ人を集めることである。兵亂に遭つて荒廢した部落

には、一人の人間もゐない。しかし宣撫班は、支那人がこんな場合何處に隠れてゐるか、また何處に物を隠すか知つてゐて、人々を集め、物資を提供する様に仕向ける。

可愛想な支那の民衆には、皇軍と支那軍との區別を知らない者が多い。彼等は兵隊とさへ言へば、悉く掠奪や慘虐を商賣にしてゐる者だと思ひ込んでゐるのだ。

そこで宣撫班員は先づ彼等に、日本軍といふものをよく納得させねばならぬ。日本軍の眞意を説明し、皇軍は支那の民衆を敵とするものでないことを了解せると、彼等は次第に仲間の者を集めて來る。又、今まで隠して居た物資を集めて來る。かくて之等の人を使つて、通路の修理、架橋等に手傳はせ、物資を購入して、軍の作戦に協力することが出来る。

かゝる際に、宣撫班は武器をも持たず護衛も無い場合でも、身を提して通譯を

し、情報を集めて皇軍を援ける。下働きといふ言葉があるが、かゝる場合の宣撫班の任務は、軍を出来るだけ助ける爲に全く一身を捧げるのである。

唯だ一枚のピラを宣撫班員が、如何に大切にするか、班員は此の一枚のピラでも一人或は數千人を日本の味方とするといふ意氣で、大切に持つて行く。

しかも班員の活動は前にも言つた通り殆ど武装しないまゝ言はば敵中に於て行はるので、常に犠牲の絶ゆることがない。しかし班員の血潮のあとには、明朝東亞の礎が固く固く築かれる。

後方宣撫班の諸工作

前節は主として従軍宣撫班に就て述べたのであるが、今度は後方宣撫班について述べる。後方宣撫班も亦、先づ皇軍に占據された地方の下層民、老幼者を集めて、日本軍が出動した眞意を丁寧に説き聞かせ、更に敵の情報を探し、然る後民

衆の希望を聴く。

こちらで求むるよりも、先づ彼等の希望を聴くのである。こちらが心を虚しくし、胸を抜いて語り、彼等にこちらの誠意を認めさせれば、彼等は、自分達の仲間が今何處に居るかを知らせて呉れる。そこで宣撫班は彼等と呼び戻す工作をする。避難民を歸來させるにも、勝手にバラ／＼に入れては、便衣隊が混入してゐたり、殊に夕方など色々な間違ひが起り易いので、必ず宣撫班員が彼等の匿れて居る場所に行つて隊を作らせ、旗などを持たせて、適宜な時刻に連れて来る。

歸來者には直ちにそれ／＼の業務に就かせ、その地方を成るべく速かに平靜に復せしめる。そして民衆の中の有力者を集めて、治安維持會を結成する。

かゝる活動を通じて、宣撫班の最も苦心するのは、眞に徳望あり且つ辛抱強い中心人物を見付けることである。新様な人を一人見付けることは、烏合の衆を百

人集めるよりも有効である。手腕よりも村民の信頼を得る人物を求ることが大切である。

さて、かくして治安維持會が成立し、街がやゝ平靜に復して來て宣撫班が自分達の味方だといふことが分ると、民衆も實に煩瑣な面倒な問題を無限に持ち込んで来る。

宣撫班は、此の民衆の紛然雜然たる要求や希望を、決して拒否したり抑壓したりしないで、一々彼等の言ひ分をきき、適當な對策を樹てゝやる。

従つて物資の需給、治療施薬、炊き出し、日本語の教授から彼等の商賣上イザコザの調停まで、有りと有らゆることに面例を見ねばならぬ。

また、優秀な青年を集めて、青年宣撫班を作り、婦人を集めて婦人宣撫班を作り、敗殘兵土匪の襲撃に備へて自警團を組織することも重要な任務である。

かゝる宣撫班の活動は、漸く皇軍占領

地域の民衆に理解せられて、彼等は今の宣撫班を見ること慈母の如きものがある。かくの如くにして、天に代りて不義を伐つ日本軍の魔神の如き強さと、同時にその反面に於ける正義擁護と良民育成の優しさとが、日に／＼深く支那民衆に認識され、新しい日支共存の根が大地深く入つて行く。

まことに皇軍の武動が千里を照破する燈臺の光であるならば、我々宣撫班員はその礎となつて、この光を愈々明るく美しく支那民衆の魂に培ふ役目をするものであらねばならぬと思ふ。

戦後の各地

軍の作戦に形影相伴ふ宣撫工作の結果は、之を各地の現状に照らして見ると最も明かである。

先づ住民の歸來状況に就て見るのに、戦争直後殆ど絶無であつた各地區の歸來者が、河北省の鐵道沿線では既に九割に

及んで居り、その他は四割乃至七割程度である。之は戦争直後の状況としては非常な好成绩であつて、今後の復歸者は急速に増加する傾向にある。ことに昨年十月十四日北京に新政府成立して以來は、各地治安維持會は、續々として新政權の下に集り、民心の安定は日に著しいものがある。

戦争のために物資の動きは非常に減退してゐたが、之も日本軍の軍律嚴正なること、取引の安心正確を認識せしめ、各種旋斡に努めた結果出廻り活潑となり、戦争直後の極度なる物資の欠乏状態は著しく緩和され、商店や市場は復興の意氣に湧き立つてゐる。

津浦線一帯は、稀有の大雨と、敗殘兵の提防破壊によつて恐るべき大水害を受けたが、春耕は四割乃至六割可能と豫想せらるゝに至つた。この地方の農民の宣撫には大いに努力しつゝあり、相當の成績を擧げてゐるが、種子の不足と家畜の

激減の爲に、其の恢復は容易ではない。こゝには充分なる資金の貸付と種子の配付が必要である。

學校は從來も極めて不充であつたが戦後は一層教員が不足し、ことに適當な教科書もないことゝて、頗る不便であるが、目下日本語の講習を實施し、且つ成る可く多數の學校を開かしむべく努力しつつある。

今次の戦争に於て日本軍は、敵の主力を目標として猛進撃せる爲、沿線には尙敗殘兵が横行して良民を脅す状態であるから、極力愛護村の成立を圖り、情報網の設定と強化に努力しつゝある。この運動の結果、住民は自ら進んで線路を巡察して、兵匪の襲撃及び鐵路の破壊を防ぎ一日一報主義の如き情報提供を實行し、眞に各自の生活を守るために強固な自警團を組織して、猛烈な訓練を實施しつゝある。

以上の如き諸運動によつて、今や皇軍

占據地域の支那民衆は、永き壓制の鐵鎖を切つて明朝北支の建設に邁進しつゝあり、ことに新政權成立後の運動は、更に一段の躍進を遂げつゝある。

魂と魂をつなぐ

「まこと一すじ」

以上で自分は宣撫班が如何なるものであるかの大要を述べたと思ふが、更に宣撫の實踐を通じての我々の偽りなき心境を云へば、大體支那の民衆は今迄、その一生を奪はるゝことに終始してゐた。その教育をその財産を、更にその生命をまで、彼等は如何に動物の如く奪ひ去られたことであらう。

我々は此の奪はるゝことより外に知らぬ彼等に、先づ與へねばならぬ。與ふべき一碗の米も、一錢の錢も無い場合にはせめても優しい言葉、平和な微笑をでもよい與へたいと言ふのが、我々のほんた

うの心持である。斯かる心構への上でのみ、眞の宣撫は花咲くのである。

私の實踐を通じて見た支那人の農民は實に勤勉であり、素朴である。雜草の如き強靱な生活力と共に、大古の民の如き悠揚さを持つて居る。反復術數なき不信の徒は、支那の政治家、軍人、觀念的インテリであつて、彼等の桎梏の下に泣く農民や勤勞大衆は、眞に愛すべき人々である。

かゝる人々を相手にするのであるから此方も誠意を以て對せねばならぬ。我々は支那の古裡の如き老政客や、曲學阿世の學者などを相手にせず、この勤勞大衆と眞に手を握るべく働いてゐる。

皇軍の眞意を知つた、支那の青少年の日本語熱は非常なものである。勿論それ等の中には日本語の習得を出世の早道と思つてゐるものも多數居るに違ひ無いが、それはそれでも宜い。彼等のその希望を達せしむべく宣撫班員は日本語の教

師にもなる。そうして居る中に更に本質的な民衆指導が行はれる様になることを信ずる。

皇軍の眞意義が實證せられるにつけて日本の皇道精神戦線が、ロシアの赤色ルートに對抗して力強く伸びて行く。

道は長安に通ず——日本の佛教徒はその昔長安の都に佛の大願を求道した。そしてそこに大なる光を得て日本の國に培ふた。今その長安は赤色ルートの重要なポイントとなつてゐる。我々は此の赤色ルートに顛られた長安の都を、皇道戦線の一翼とし、新東洋の一礎石とせねばならぬ。日本の佛教徒、すべての日本人が高き宗教的熱情を抱いて立上らねばならぬ。

その高遠なる理想と慈悲を、可愛想な支那人に與へねばならぬ。その最も具體的な表れは、支那人に對する親切である。支那人に親切を盡せ。事實に於て支那人の生活を護り、その幸福を増進せ

よ。これらのことを實踐することが大切だ。大仰な百の宣傳よりも、ささやかな一の實踐こそ我等のなすべきことである。

私が直接聞いた話がある。それは錦州から進んで密雲に宿泊した時のこと、杜と云ふ家に泊つたら、八十位の老婆がゐて語るには、『自分には孫も子もあるがあれ達は日本軍が攻めて來るといふのでまご／＼して居れば生命が危いと云つて

北京に逃げて了つた。しかし自分は逃げなかつた。自分は北清事變の時の日本軍のことを知つてゐるから、日本軍は少しも恐くない。北清事變のとき自分の家に日本軍が來て泊つたが、その時日本の兵隊が蒲團を貸して呉れと言ふから自分達で着るのかと思つて出してやると、それを皆軍馬に着せてやつて、自分達は寒いのをちつと我慢してゐた。そして我々支那人をとてもいたはつて呉れた。

だから自分は今度の戦になつて、國民

政府や共産黨が來て「日本軍が來れば支那人は全部虐殺されるぞ」と宣傳しても日本軍を信じて、こゝに居残つたのだ」

北清事變から今まで、は殆ど四十年も經つてゐるのに、その時の日本軍の軍律の嚴肅であつたのを覚えてゐて、今度の事變にも日本軍の便宜を計つてくれた古老はあちこちに居た。反覆常なしと言はれる支那人にも、淳朴な農民にはこんな美しい一面がある。

こちらが大慈悲心を以て臨めば、支那の民衆は必ずよき伴侶となる。支那人は殘虐である、功利的であると言つて、支那人を全て人非人の様にこき下して計りゐては、眞の提携は出來るものでは無い。

彼等に學ぶ

我々は支那人にも、蒙古人にも學ばねばならぬ優れた點を見出す。支那農民のあの土に對する恐しき程の愛着、幾千度

の水害、旱害蝗害、軍閥、地主の搾取に遇つても、彼等は斷じて自分の土地を守つて行く。亦北滿に南洋にその他世界の各地に、國家の背景など全く無いまゝで蔓つて行くあの強烈な生存力を學ばねばならぬ。

蒙古の民は無智だと言はれるが、彼等は暗夜に迷へる羊の群を發見し、目標の無い曠野の中に方角を定めることが出來る。更に尊きは彼等の「泉の掬」である。

曠野を遊牧する彼等を取つて、ときたまに見出す泉は千金の價があるものがあるが、しかし彼等は決してその泉の水を自分だけで汲み干すことをしない。丁寧にその一部を汲み取つたあとで、清らかな水を後より來るものゝために残して置く。我々日本人は、蒙古人の此の泉に對する如き心を以て、尊き日本の使命の泉を彼等支那の民衆に與へねばならぬと思ふ。

支那の復古と維新

支那は嘗て儒教の發生の地であり、佛敎文化の榮えた國であつた。しかし今は、それらのものは悉く生命を失ひ、地下深く眠つて了つた。

支那の風物に接して我等の強く感ずるのは、その妖しきまでの老衰である。北京の宮殿は絢爛たる豪華の佛を残して居るが、そこには少しも生命の發刺としたものが感ぜられない。

佛敎興隆の地であつた五臺山は荒れはてしそこにはソ聯の手が伸びてゐる。

孔子も地中に眠つて、今の青年層はそんな偉人が支那に存在したことさへも知らぬ。嘗て全歐の聯合軍を一蹴した大蒙古の民は、喇嘛の妖敎に害されて、草原をさ迷ふ一集團と化してゐる。支那のかつての聖敎や、文化や、威武や、それ等は悉く倦みつかれた老衰頹廢の中に眠りこけてゐる。

我々は支那の大地を耕して資源を目ざめさすと共に、更により深い大地の底から之等の古き支那、眠れる支那の魂をゆり起さねばならぬ。そこに民衆の魂の覺醒がある。

支那は復古しなければならぬのだ。そしてそこから立上つて新しい支那が生れねばならぬ。共產黨と不當な外力に依存する舊政權が否定されて、新政權の下に一切が新しい太陽を仰がねばならぬ。そこに支那の維新の夜明けがある。

人！人！人！

今度の事變は、日本と支那とが再び相争ふことなき永久の平和を來らせんが爲の天啓である。

新なる東洋の歴史を、日本は今血潮を以つて書きつゝある。我々現地にある者は身を以て、その歴史の一面を、一行を一字を正しく書かねばならぬ。皇軍の勢力は日に／＼素晴らしい勢で

伸びて行く。従つて今後の宣撫班工作も亦大いに擴大深化せねばならぬ。従つてその任に當る人を要することは愈々大であるが、私はこゝで衷心から母國の人々にお願ひする。

『よい人を送つていただきたい』
今宣撫班員は血を以てアジアの歴史をかきつゝある。八紘一字の大道を荒れた大陸の野に布きつゝある。身を以て佛の敎へを説きつゝある。

今次聖戰が眞に有終の美を納むるか否かは支那民衆が眞に日本の眞意を覺り、日本と融和するか否かに懸つてゐる。それを思へば、支那民衆の宣撫が如何に重要であるかは明かであらう。

も早大言壯語を以て、鬼面人を驚かさんとする粗暴なる所謂大陸浪人や、隱微諷刺なる商略的政治家の時代は過ぎた。敬虔に、親切に、明朗にして總明に、しかも不退轉の決意を以て皇道宣布の殉敎者たり、アジアの魂となる人を、明日

行く大陸に待ち望んでゐる。

かゝる人を得らるゝか否によつて、日支の將來は明暗の岐路を決することが出来るのである。私は、この一事を天地に貫く誠を以て希望する。

英國は東洋侵略の元兇であるが、彼の國の母達が、その子弟を海外發展の爲に捧げた態度には、眞に學ぶべきものがある。彼女等は、その子弟を育くむに當り、或は優美なる作法、典雅なる音楽詩歌を以て紳士の道を敎へ、或は勁烈なる訓育を以て心志を剛健ならしめ、常に指導者としての自恃自信を持たしめ、よき若者となし、その後、彼等を全世界に送り出した。かくて若き有爲の青年は、或はアフリカへ、或は濠洲へ、或は印度へ、或は加奈陀へと、七つの海を越えて雄飛したのであつた。

今日日本の母は、この英國の母に學ばねばならぬ。そしてその良き子弟を、伸び行く祖國の第一線に送つていただき度

い。母のみでない、全日本の教育家が、政治家が、實業家が、その周圍にある優れたる人々を、競つて新しき大陸に送つていただき度い、之は私一人の希ひではない。

新しいアジアが、明け行く大陸が、血を吐く如き痛切さを以て呼んでゐる、魂の叫びであり、運命的なる呼びかけである。

私はたゞこの一事を言ひ度いのであつた。私はこゝに今一度、衷心より祈る。『人！人！人！眞の殉敎者を現地に送れ！』と。



爾の時に一りの菩薩比丘あり、常不輕と名く。得大勢よ、何の因縁を以てか常不輕と名くる。是の比丘凡そ見る所ある若しは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を悉く禮拜讃歎して、是の言を作さく『我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず、所以は何ん、汝等皆菩薩の道行じて、當に作佛することを得べし』と。而も是の比丘、専らに經典を讀誦せずして、但禮拜を行す、乃至遠く四衆を見ても、亦復故らに往いて禮拜讃歎して、是の言を作さく、『我敢て汝等を輕しめず、汝等當に作佛すべきが故に』と。

不輕品

法定而國清

笹川日堂

教法の功用

小乘は自調自度を旨とする自行主義で、大乘は自行化他、所謂共存共榮の菩薩行である。日蓮上人が『御宮仕を法華經と思召せ、治世の語言養生の産業等實相と相違背せず、皆正法に順ぜん』と示されたるは大乘の妙味實に此にある。

享樂は人類の愛欲する處であるが、眞の快樂は道を行ひ、其の徳行の結果であらねばならぬ。泥に投じて自ら溺る者を凡夫とす、弱きをおどす畜生の心とす、身は軽く義は重しとするを菩薩とし、また菩薩行とするのである。

菩薩とは丈夫なり君子なり大人なり

菩薩は必らず六波羅蜜を修行して向上を計る。六波羅蜜とは六度なり、度は度生の意味で人生活命の目的を達することである。人生活命に就て、那先比丘は六善事を説いたが、此に六善事と菩薩行の六度と對照すれば、

六善事 誠信、孝順、念善、一心、精進、智慧

六度 布施、持戒、忍辱、禪定、精進、智慧

更に世諦即佛法の見地より再記すると

報恩を孝順、感激は念善、勇氣は精進、純潔は誠信、情操は布施、仁愛は一心

となる、これを日蓮主義より見れば

人類活動の本義(立正) 教法の體現(信仰) 皮相文化の啓蒙(内智) 人格の完成(仁愛) 護國の信念(忠孝)

是の如きは纔に其の一端を示したに過ぎない。

釋尊の教示

博く聞いて道を愛すれば、道は必らず會しがたい、志を守りて道を奉ずれば、其の道の甚だ大なるを會得する。道を行ひ眞を守る者は善で、志と道と合ふ者は至大である。欲は汝が意より生じ、意は思想を以て生ず。薄徳の人は善根を種へず貧窮下賤にして五欲に貪著し憶想妄見の網の中に入る。

教學 正見の學を務めて増す、是を世間の明と爲す。

篤信 信は戒を誠ならしめ、また智慧を受く。

雙要 心を法本と爲す、心尊く心に使はる。

心意 慈は常に自ら護る、能く守れば則ち安し。

奉持 普く天下を濟ひ、害なきを眞道と爲す。

七不衰の法

釋尊在世の時、跋耆の國民に對して七不衰法を教示された。摩訶陀國の阿闍世大王が、心切かに併吞を企んだが、到底不能であると斷念した。一小國が諸大國の間に介在して、侮辱せられず侵掠せられず、國家の體面に保ち平和の樂土を築くことは、實は左の七不衰法の賜であらう。

一 君臣和順上下相敬ひ、國人共に集會して正事を論説す。

二 宗廟を恭敬し、法を遵奉し、惡を曉り、禮度に違はず。

三 父母に孝仕し、師長名徳を崇敬し、所有の舊寺は修飾して廢せず。

四 施設する所は濫に改易せず、舊き制規も善く奉行す。

五 力勢を以て横暴ならず、他の婦他の童女等弱者を犯さず。

六 閭門眞正純潔にして穢なく、戲笑にも言語邪曲ならず。

七 沙門に宗事して教を受け、慈行に懈怠せず。

戒慎 食ふて自ら節を知り、悟つて意に應ぜしむ。

慈仁 守るに慈愛を以てし、怒を見るも善く忍ぶ。

放逸 貪らざれば死せず、道を喪ふを自ら喪ふと爲す。

明智 法を喜べば臥して安く、心悦び意清し。

道行 言を慎しみ正を守り、身に不善を行せず。

記事

本部團報

幹部會 七月二十四日及び三十日の兩日に亘り、本部に役員會を開催して左の事項を協定した。

八月中に夏期講習會開催の件

知法恩國會併合と『教』廢刊の件

而して同會は理事長の適任者を得る迄、母體である本團統制の下に、時代對應の運動を活潑ならしめるべく、八月十一日其運を見た。又代用品のない貴重な紙の節約から、『教』誌は斷然本誌に所謂統一の實を擧げたのである。

講習會 國民精神總動員、經濟線強調、長期建設の國策に微力を捧ぐべく、八月十九日から二十二日迄午後七時より勤務後九時半迄左記の通り、信仰報國第一回夏期講習會を本部講堂に開催した。

信仰の必要と佛教の本質

高學士 中村清 一氏

日蓮聖人の人格と其宗旨

妙法蓮華經の摘要

文學士 河合 眇 明氏

日本國體と佛教

文學士 山口 智 光氏

本佛教會 和 賀 義 見氏

躍進日本と國難

同心會々長 池 田 新 一氏

日蓮主義の信仰方針

本團理事 磯 部 滿 事氏

時節柄とはいふものゝ、残暑の堪へ難い一日の勞苦も何のその、一切は精神からであると遠くは横濱からも來會され、全講堂を壓する程豫期以上の盛況に、講師も聴衆も熱誠一體の有様に寧ろ涙ぐましい感激又感謝であつた。今便宜上テキキストを示して、各位の御参考に資したいと思ふが、紙數の關係上來月號に割愛する。

福島支部報

八月八日 午後七時中村様方にて。

磯部先生の御來顧を仰ぎ支部例會を催す。先生には目下國民精神總動員の強調と共に、從來の人間本位、物質價值最上の宇宙觀は、人間以上の存在を中心とする精神主義に行かんと

して居るとお説きになり、その哲理的基礎たる佛教の系統につき左の御法話があつた。

法統の傳弘に二種あり、一は師弟口傳の血脈相承にして他は經典によつて直ちに佛陀の精神を把握する經卷相承である。日蓮聖人は人師の云ひ傳へは往々にして誤りありとなし給ひて、血脈相承を棄て佛陀の依法不依人の金言によつて經卷相承をお採りになつたのである。而して大聖人の後も亦御弟子は多く血脈相承と立て、口傳等を重んじたのであるが、

日什正師は經卷相承を繼がれ、宗祖聖人に倣はれたのである。日什正師の流を汲み佛教の正統派を以て任ずるもの、宜しく未曾有の國難に處して大に自覺する所あるべし。國防の中心は國民精神である。もし正しき思想の確立することなくんば五天の兵と、千の須彌を以て磐とするも國を守るに由なし、反省自重なくんばあらずと、正しき信仰に活くべく高調された。

日時 來九月一日午後七時三十分 開場
場所 小石川區音羽町六丁目 統一會館

大震 火災 記念追悼法要並講話

講師 成佛と淨土論 高學士 中村清 一氏
演題 支那事變を如何なる戰略に? 陸軍歩兵 少佐 三原敏男氏

財團 統一團
法人

國費誌料維持費及寄附金額收 (自七月二十一日至八月二十一日)

一金壹圓貳拾錢也	東京	日下部	二葉殿
一金貳圓參拾錢也	尾道	河本	梅藏殿
一金五圓	萩	村田	よし子殿
一金六圓七拾五錢也	川崎	毛見	春吉殿
一金五圓	札幅	田邊	松次郎殿
一金拾圓	千葉縣	片岡	盛助殿
一金壹圓貳拾錢也	同	並木	博殿
一金貳圓五拾錢也	横濱	杉本	光衛殿
一金貳圓貳拾錢也	群馬縣	増田	清三郎殿
一金貳圓五拾錢也	福島縣	金澤	利江殿
一金貳圓五拾錢也	同	小澤	菊殿
一金貳圓貳拾錢也	茨井縣	林川	吉殿
一金四圓四拾錢也	東京	宮澤	見殿
一金貳圓貳拾錢也	同	池原	泰明殿
一金貳圓貳拾錢也	同	中島	應殿
一金拾圓	同	増山	三郎殿
一金壹圓貳拾錢也	福島縣	中島	道殿
一金貳圓五拾錢也	東京	石川	成録殿
一金貳圓五拾錢也	同	伊藤	わか殿

以上難有入帳仕候也

これを以て領收證に換度候

財團法人統一團會計

團費誌料等は滞らぬ様帶封
記入の未收年月を御注意の
上可然御配慮願ひ致しま
す。
團費は一ケ年金貳圓五拾錢
以上となつてゐます。表紙
裏の略則御一覽下さい。

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	特價	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	送料共	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		全	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要		全	金貳圓九拾錢
眞理の基礎に對つて佛敎の信仰		全	金拾五錢
法華經要品		全	金五拾錢
日生上人レコード(四冊)		全	金參圓廿五錢
日蓮聖人		全	金拾錢
本章意識に就て		全	金貳拾錢
釋尊の八相成道		全	金貳拾錢
法華經の心髓		全	金壹圓五拾錢

佛敎の心髓	全	金壹圓七拾錢
佛敎の心髓	全	金壹圓

河合妙明著
皇道と日蓮主義
送料共 金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ七十
財團法人統一團出版部
振替東京九四二〇番

統一團 定價
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半ケ年 金壹圓貳拾錢
一ケ年 金貳圓貳拾錢 送料共
▲御申込へは送前金ノ事
▲前金相切候節へ包紙ニ其旨表示可
▲御購居ノ場合へ必ず新舊共直ニ御
通知ノ事

昭和十三年八月廿八日印刷納本
昭和十三年九月一日發行

東京市小石川區音羽町六ノ十七
編輯部 磯部滿事
發行人 磯部滿事
印刷所 野島好文堂印刷所
電話牛込六九六六番

東京市小石川區音羽町六ノ十七
發行所 財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番



次 目

佛敎の根本と其の應用(其五).....	本多 日生
開目鈔講話(第二十四講).....	小林 一郎
後諫手引草(下卷).....	本妙院 日珠
講習會テキスト.....	中村清一 山口智光 池田新一
聖滅の月.....	磯部 満事
記 事.....	磯部 満事
大藏經要義續篇(其十三).....	本多 日生

○本部團報 ○願島支部報 ○團費誌料寄附金及維持費領收

號月十年三十四第

13/11-27